
オセロみたいな世界で勇者の抜け殻に取り憑いたみたいです。

六休

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オセロみたいな世界で勇者の抜け殻に取り憑いたみたいです。

【Nコード】

N9441U

【作者名】

六休

【あらすじ】

何かに疲れ果て異世界よりやってきた勇者タツオー。

その世界で小さな幸せを見つけようと、真面目に生きてきた少年立夫。

ある日、交通事故で死にかけていた立夫の下にタツオーが現れるが、

彼のわがままによって勇者の元いた異世界に飛ばされてしまう。

そこで彼は、勇者タツオーの肉体に無理やり憑依させられ、日照権を賭けて争いを起こし始めた二つの世界を知る。

その2つ世界は、人の心の光と闇を表すような形で文字通り1枚のオセロの石のように存在していた。

一つは日のあたる世界イナーズ（通称：白）

もう一つは日の当たらない世界ザーズルー（通称：黒）

立夫は、彼を勇者タツオーとして、二つの世界の日照権を賭けた争いに巻き込まれてしまう。

公務員の父に育てられた立夫は、イナーズに住まう人々の既得権益を守る為に半ば仕方なく立ち上がるが、彼の前にはさらなる既得権益とそれを巡る争いが立ちはだかる。

そして、最終決戦ジメントの日、太陽を手にするのは誰なのか？
因果応報、紆余曲折、3、4がなくて、大冒険？の物語が始まったのだ。

シャル　ウィー　スワップ？　僕らを交換しませんか？（前編）（前書き）

若干の残酷描写があります。

具体的な描写はありませんが、想像力や感受性の豊かな方は、へそに力を込めてください。

シャル ウィー スワップ？ 僕らを交換しませんか？（前編）

ここは地球のとある国。

まだまだ寒さが身に沁みるが、遠からず春の訪れを感じさせる陽気が続くある日の事。

とある高等学校では入学試験の結果発表が実施されている。

試験の結果に喜びハシャグ顔があれば、泣き崩れる顔もある。どうやら、地域で一番の偏差値を誇る進学校らしい。

その校門を出て、喜色満面の笑みを浮かべた男子二人と女子一人が連れだつて家路に着いていた。

僕の名前は横嶋 よこしま 立夫 たつお。

15年前に父・立郎と母・洋子の子として生を受け、親の敷いたレールの上を一度も踏み外すことなく生きてきた。所謂、良い子というやつだ。

物心がついた頃から地方公務員である父を尊敬し、将来は父のように派手さはないが堅実な公務員人生を送りつつ、趣味の一つや二つを嗜むのも有りだな、なんて思っていた。

そして、あわよくば母のように慈愛溢れる女性と出会い、今と同じく円満な家庭を築きたいなんて老成した考えさえ持っている。

そんな僕を、幼稚園の頃からの幼馴染みである島村 しまむら 剛 たけしが、「えと・

・中の人はおいくつですか？」とからかってくる。

彼はプロレスと馬鹿話を愛するユーモア人間で、人一倍正義感が強く、将来の夢は警察官になることである。しかし、最近主人公の刑事赤山が警察組織の軋轢に四苦八苦しながらも犯罪と闘う刑事ドラマにハマり、「俺は出世して警察を改革する！」と息巻いている。

そして、最後の一人である女友達の福嶋^{ふくしま} 摩耶^{まや}が剛に加勢する。

「本当におじいちゃん幽霊でも取り憑いてるんじゃない？」

わざとらしくかぶりを振って演技がかった心配顔で僕の目の奥を覗き込み、直後に剛と共に吹き出した。

彼女は、中学2年のクラス替えの時に、僕と剛と同じクラスになり仲良くなった。暇があれば3人で集まってはバカ話をして盛り上げる様を見て、程なく他のクラスメイトからは”トリシマ”（3を表す”トリ”と、3人の苗字に”シマ”が付くからトリシマらしい）と呼ばれるようになった。

あまりに仲が良いから、摩耶が僕と剛のどちらと付き合っのか？という思春期らしい期待を込めてトラシマ（三角関係 トライアングルだから）と一部の女子が陰で呼んでいるらしいが、麻耶の強気な性格に押されて誰も聞き出すことができないのが現状らしい。

実は、その期待には剛がこっそり応えていたりもする。

つまり剛と摩耶は付き合っているのだ。

2人は陸上部に所属しており、1年生の頃から互いを意識していたらしい。

だけど、思春期の気恥ずかしさが勝ってしまい、あまり話すことも

できなかったらしい。

かぁ、ウブだねえ。 （自分のことを棚上げしていることは気にしない。）

2人ともお互いが気になって夜も眠れなくなっていた頃に進級し、運命の巡り合わせがクラスメイトになったのだ。

それでも、話し掛ける勇気を振り絞ろうか迷っていた所に、僕の登場だ。

最初は、僕が隣の席になった摩耶と仲良くなり、僕にチョコチョコ話し掛けにくる剛を巻き込んで仲良くなっていて・・・遂に春は訪れたというわけだ。

そんなわけで、2人からは縁結びの神様として崇められていた時期もあったが、今ではすっかりおじいちゃん扱いが定着してしまい、毎日おじいちゃんイジリを繰り返している。

老人は労るんじゃないのかよ！

だけど長い付き合いの剛の気をそらすのは朝飯前だ。

今日もいつものように彼の敬愛する南国系プロレスラーのグアバ仮面のマネをしてジャンピング・グアバット（ローリングソバットみたいなもの。以後、グアバット）を決めようと襲いかかっていた。この技は敵の視界の外へ驚異的な跳躍力で跳び上がり、延髄に後ろ回し蹴りを叩き込むもので、決まれば相手の意識を一時的に失わせることもできてしまう必殺技だ。

この技を決めてやれば、その後はグアバ仮面伝説を興奮しながら語り出す剛に適当に相槌を打っていればいいのだから楽だ。

ちなみに、僕は曲芸部という珍しい部に所属し、生涯の嗜みとする趣味を模索している。

そんなわけで、アクロバットや大道芸などを日頃から研鑽している体は軽く、今日も余裕で剛の抱えるカバンに狙い通りグアバットを叩き込むはずだった。

そこで、トラブルが起きたのだ。

なんと、いつもは反応することもできなかった僕のグアバットを剛が完全にかわしたのだ。

その原因はすぐにわかった。

いつもは少し後ろにいて剛が転びそうになるのを笑い飛ばしている摩耶がなぜか真剣（というか必死）な表情で剛を突き飛ばしたのだ。結果として剛は転びそうになったのだが、僕まで勢い余って転びそうになってしまった。

とまあ、それまでの道のりに起きていたことや、これまで歩んできた僕の人生が走馬灯のように脳裏を駆け抜けていった。

少し後方に大型トラックが走っていた。

そして、勢い余った僕はよろけて歩道から車道へと飛び出してしま

っていた。

素直に転んでいれば車道のギリギリ手前でストップできたのに、3人揃って同じ高校へ通える嬉しさで浮かれていたのだろう、判断を誤ってしまった。

今まさに僕の命を食い尽くさんとマンドラゴラの根っこのような鋭い悲鳴（いや、聞いたことないけど）を上げながら、トラックが迫る。

刹那。

鈍く低い音や、何かが弾けるような音が同時に響き、僕は宙に飛ばされていた。

どれ程の時間が経過したのだろう。
気がつくと私はベッドのようなもの上にいた。

と言ってもベッドに横たわっているのではなく、ベッドの上空1メートルの所に浮かんでいた。

……めろ！……

目下では、手術着を身に付けた医師や看護師達が、慌ただしく誰かの体を切ったり縫ったり汗を拭いたりしていた。

どうやらどこかの病院の手術室らしい。

患者の出血が酷いのか、執刀医の手術着の至るところに血が滴っている。

患者の顔を覗き込んでみたが包帯でグルグル巻きの上に酸素が当てられており、誰かはわからなかった。

・・・だ！・・・

変な夢を見るもんだなと暢気に構えて部屋の中を眺めていると、不意に患者に繋がれている機械からアラームが鳴った。

手術室の空気が凍りつく・・・ことは無かった。

慌ただしい雰囲気はそのままに、リーダーらしい執刀医が看護師に指示を出した。

「バイタル回復にアレ10mg投与！」

すぐに看護師が近くのワゴンから薬品の入ったビンを取り、注射器を突き刺す。

アレでわかるのか・・・。

・・・かに・・・まるか！・・・

チューツと薬品を吸わせ、気泡を取り除いた注射器を、間髪入れず

に患者に差し込み薬品を投与した。
すると、うるさく鳴っていたアラーム音が消え、規則正しくピツ・ピツ・・・と音を刻んでいた。

・・・う・・・れば・・・やる！・・・

患者の心臓は持ち直したように見えたが、またアラーム音が鳴り出し、執刀医が慌ただしく手元を動かしながら何かを叫んだ。

しかし、その叫び声は僕の耳には届かなかった。突如目の前に変な格好をしたイケメンが現れた為だ。

ロールプレイングゲーム

そのイケメンはまるでRPGに登場する騎士のような鎧を身に纏い、腰には剣がぶら下がっていた。全身が白く発光しているが眩しい程ではない。

これがイケメンフラッシュというものと勝手に納得して観察を続けた。

イケメンは、なぜか手術室に横たわる患者と僕をしきりに見比べている。

手術室の医師達は、誰も僕のことには気づいていないのに、この人には見えるのかな？と思ったが、夢の中では脈絡もなく色々なことが起きるのは当たり前なので、放っておいた。

暫くお互いを観察していると、いけめんが何かに合点がいったらしく、急にニコリと爽やかな（しかし、どこかいやらしい）笑顔を浮

かべて話しかけてきた。

「やあ、初めまして。」

「あ、どうも。」

「いきなりだけど、君はそろそろ死ぬよ」

「はあ・・・まさか、これが世に言う予知夢ってやつかな？」

「いや、夢じゃなくて現実だから。足下に横たわっているのは君の体だよ。」

「えっ？じゃあ僕は誰？ここはどこ？あなたは誰？」

少しからかうように質問したら、イケメンの笑顔が半分崩れてこめかみに青筋が浮き出ている。どうやら怒りたいが、何かの目的を達成するために我慢しているようだ。

暫く下を向いて、僕にはよく聞き取れない声の大きさに念仏のような言葉を呟き、ふと我に返ったように僕と視線を交えてきた。

「じゃあ、納得できるように君を一度体に戻してあげるね！」

そう言うと、イケメンは目を閉じて精神を集中させる素振りを見せ、ただでさえ光っているのに更に眩しく輝き始めた。

そのあまりの眩しさに目が眩みそうになり、目を瞑ってもまだ眩しい。

仕方が無いので、右手で光を遮ろうとしたが動かない。

まさかの金縛りなのか？おじいちゃんの霊じゃなくてイケメンの霊
が取り憑いちゃったのだろうか？これから急にモテ出したりしたら、
それはそれで楽しいかもしれないと考えていると、急に眩しくな
くなった。

恐る恐る目を開けてみると、先程とは異なる光景が目飛び込んで
きた。

目の前にいたはずのイケメンも緑ずくめの人物に変身し、僕の右側
の少し離れた所から私の顔を凝視している。

どうやら、今度は仰向けに寝ているらしい。金縛りは継続しており、
息苦しくなってきた。

あまりに苦しくなってきたので口で呼吸しようとしたら、口の中に
何かが突っ込まれており、そのパイプから定期的に空気が流れ込ん
でいていた。しかも、テープか何かでしっかりと固定されているため、
体の動かせない体では外すこともままならない。

なんとかならないかと周りを見回すと首から下の視界の大半は緑色
の布で覆われており、その布に邪魔されない頭上右手の方にいる、
少し離れた所にいる緑ずくめの人物をもう一度見上げた。

もしや、今度の夢は……

僕は巷ではちよつと名の知れた高校生探偵、ほんもつ たける 本望 猛。

ある日、幼馴染の凜と遊びに来た遊園地で見かけた緑ずくめの男に
事件の匂いを感じ取り、後を付けるまでは良かったが、その男の仲
間に見つかり捕らわれてしまう。彼らの秘密基地に連れてこられた
僕は、そこで怪人となるべく改造手術を施されてしまう。

しかし、僕の正義の心は彼らの思惑を大きく超え、正義の超人仮面ドライバーが爆誕する！

行け！本望 猛！行け！仮面ドライバー！僕の双肩には60億人の平和がかかっているのだ！

みたいな夢なのかなと思った。そういえば、緑色の布のせいであまり見えないけれど、ここは手術室のようだ。

さっきも手術室上空にいたから、話の導入部が終わってこれから本編のスタートなんだろう。ワクワク

そんなことを考えながら緑ずくめの人物を見ると、彼（彼女？）は私の左側（布が邪魔で見えない）に向かって何かを叫んだ。まるで、トンネルの中で話しているような変な残響の為にうまく聴き取ることができない。きつと謎の薬物INLUP3か何かを投与されているのだろう。

でも、僕の左側にある何かを止めようと手を伸ばして制止の合図を出していることは、何となくわかった。あの人が僕を逃がしてくれる紫川博士なのかな？

そして、一体何を止めようとしたのかを考えようとした瞬間に、全身に衝撃が走った。

まるでトラックに轢かれた時のような衝撃に、僕の体は寝かされていたベッド？の上で大きく跳ね上がった。

息ができない・・・。

痛みを感じないのは不幸中の幸いだが、息苦しいなんてレベルではなくて、息ができない。高い所から落ちて背中を着地した時のような感じ・・・。

苦しくて悶えそうなのに、体は一向に動こうとしない。

なんで夢の中でまで吹っ飛ばされるんだ？

え？「夢の中でまで」ってどういうこと？

・
・
・

・
・

・

・

はっ！

そういえば、最近似たような体験をしたような気がする。

まさか・・・

ボクハトラックニヒカレタノカ・・・？

などという安っぽい演出は必要なく、トラックに轢かれた事実を思い出した。

なぜ、周囲にいる人々が一様に緑ずくめなのかも理解できる。

つまり、僕はトラックに轢かれて死にかけ、病院に運び込まれて手術を受けている

まっ最中なのか。

そして、全身に走った衝撃は所謂、電気ショックというやつね。

そういえば、イケメンが現れる前に心臓が止まってたな。

ん？なんで、さっきの夢の中の手術室とこの場所で同じような光景が繰り返されているんだ？

疑問が一つ解けたと思ったら、また疑問が生まれて忙しいっただけじゃない。

ちなみに、先程の衝撃からここに考え至るまではコンマ1秒も経っていない。

電気の力が脳みそを活性化してくれなければ、こんなに早く考え至ることはできなかったよ。ありがとう、電気ショック・・・。

部屋の中では執刀医や看護師たちが慌てたように僕のそばに駆け寄り、心配そうな顔で僕の顔を覗き込んでいる。

僕の意識が戻っていたのに電気ショックを与えてしまったからだろうか、ちよっぴりバツの悪そうな顔をしている。

その上空にまたイケメンが現れ、宙に浮かびながら僕を見下ろしてニヤニヤと僕の表情を眺めている。

彼は、笑いながら僕を見下し、丁度僕の真横までスーッと降りてきた。

彼だけは僕の生み出した幻覚なのだろうか？

手術室の人々は誰も彼に気付いていないようだ。

「ね？夢じゃないでしょ？あ、ごめん。その状態じゃ話すことなんてできないね。ちよっと待って・・・」

彼はそう言うと、僕の頭をムンズと掴み、また輝き始めた。

もうイケメンフラッシュはおなかいっぱいだと、眩しいのを我慢して非難の眼差しを向けていたら、彼が僕の頭を引っ張り始めた。

途端に体から体が脱げ落ちていくような感覚を覚え、僕の体は手術室のベット上空にズルリと抜き出された。

足元を見ると、僕の身体と思わしき者が相変わらずベッドの上に横たわり、パイプやら電極に常がれ、体は大きく開かれている。

イケメンは僕の頭を掴んだまま再び腹の黒そうな、しかし、爽やかな笑顔で僕を見ている。

「どうだい？そろそろ理解できたでしょ？」

「う、うん。でも、なんで僕が二人いるのさ。あつちが僕の身体で、こつちは幽霊とでも言うの？」

なぜか、麻耶の言っていた冗談が脳裡を過ったが、気にしないでおこつ。

「うゝん、似たようなものだね。今の君は精神体が肉体から乖離してしまっているんだけど、精神体の抜けた肉体は、例えば生きていたとしても決して目を開けることはないんだ。こつちの世界の俗語で言うところの植物状態というやつかな？」

そして、君はもう身体に戻ることはできないんだ。」

「ええゝゝ！？何とかならないの？さっき簡単に戻してくれただよ！」

「確かに俺にはできるけど、ごめん。今死にかけている人の中で、君以上に相性の良い肉体は見つからなかったんだ。というか、生きている人を含めても君の身体が最高なんだよ。」

なんだこの人は。急に相性の話を始めたぞ・・・？
なぜか、背筋に冷たい物がゾゾッと流れ落ちた。

「な、何と相性が良いのかわからないけど、僕は死にたくないんだ！何でもす・・・いや、そういうのは無理だけど、努力するから助けてくれ！」

「努力って何？そんなことはどうでも良くて、これは相談なんだけど、君がああ肉体に拘らなければ生きることができるよ。あの身体でなければ嫌と言うなら成仏してもらっけど、どうだい？悪い話じゃないだろう？」

相談になっ てねえ！！

選択の余地などない、物凄い剣幕で僕を真っ直ぐに見据えている。

あの目は本気だ。あれは人を殺したことがある目だ・・・。
こゝ殺される？

いやいや、もう死んでるから成仏させられるってことが。
いやいやいや！やだよ！生きたい！

「わかりました拘りません助けてください！」

生存欲求がその言葉を一気に吐き出させた。

「よし！取引成立の握手だ！」

彼は右手を差し出してきたので、僕も右手を差し出し彼の手を握った。

途端に物凄い情報が雪崩のように僕の中に流れ込んできた。

そのあまりに膨大な情報量に翻弄されていると、握手を解いたイケメンが僕の肉体の方に手をかざし、またまた輝き始めた。イケメンフラッシュはもう飽きた。

ボーッとしながらその光景を眺めていると、先程までは出血が医者にかかるぐらい酷かったのに、それが落ち着き、脈拍も安定してきたらしい。

暫くすると、身体の切り開かれていた箇所を閉じて傷口を縫い始めた。

最後に縫い針を結んでハサミで余りを切ると、執刀医は大きなため息をついて言った。

「なんとか手術は成功した。ICU（集中治療室）に入れて意識の回復を待とう。」

僕の肉体はベッドに乗せられたまま手術室から運び出され、病院の廊下へと進んでいった。

僕は何もしなくても肉体に付いていくというか、引っ張られている感じで手術室を後にした。

廊下に出てみると、両親と剛、麻耶がその場におり、医師の説明を聞いて体の力を抜いていた。手術の成功に安心したのだろう。

イケメンはまだ僕の肉体に向かって何かをしているらしい。

僕の身体を直してくれているのかな？なんて思っていたが、そんなことはなかった。

ICUに到着して僕の肉体には、また色々な機械が繋がれていた。さすがに親たちは中に入れないのか、姿は見えない。

とりあえず、イケメンが話しかけてくるまで何もすることが無いので、僕は先程イケメンに流し込まれた情報を整理してみることにした。

どうやら、彼の記憶を流し込まれたようだ。

彼の名前はシーマ・タッツォー。

彼はこの地球の存在する宇宙とは理の異なる世界、つまり異世界に生まれ育った。その世界では太陽の子と呼ばれ、すぐれた身体能力と神秘的な力を駆使して邪な存在と戦う事を生業としていたらしい。RPGの勇者みたいだな。

しかし、波乱に満ちてはいるが、充実していたであろう彼の人生に転機が訪れる。

彼の世界にいくつか存在する国々が外交上の主導権を握る為に水面下で彼の争奪戦を始めたのだ。

広大な領地や権力者の娘をあてがわれそうになったり、権力の座や金で彼を取り入ろうとしてきたりと、単純な王道RPGのようにはいかなくなってしまうたそうだ。

そんなある日、立ち寄った王権国家の王様から依頼され、誘拐された王姫を助け出した後に、そのお祝いパーティーで一服盛られてしまった。

それでも、勇者としての高い回復力のおかげで短時間で意識を取り

戻すと、彼はベッドに縛り付けられ、彼の横には一系まとわぬ姿の王姫が、今にも飛びかからんと構えていた。つまり、既成事実を作って彼を国に縛り付けるか、それができなくても彼の子供を使つて外交パワーを上昇させようと目論んだものだった。

すかさず、王姫を神秘の力で拘束し、自分の戒めを解いた後に尋問すると、誘拐すら狂言だったらしい。

こんな話を聞かされた彼は、その世界にほとんど愛想が尽きてしまったのか、王城を脱出した後、禁術を使つて精神体となり、誰か他の人の肉体に宿つて静かに生活をしていこうと決めた（彼は精神体を見てもわかるようにまばゆいばかりのイケメンなので、隠れることは不可能。そこで、肉体は捨てることにしたわけだ）。

しかし、元々肉体と共にあつた精神体と肉体の間に普通に割り込んでも拒絶反応により弾き出されてしまう為、拒絶反応の出にくい相性の良い肉体を探しているうちに、ついに異世界間の壁も破つてこちの世界に来てしまったらしい。

彼がこの世界に来た目的は、自分が乗っ取れる肉体を探すこと。

そういうことか・・・。

僕は乗っ取られてしまうのか。

彼の境遇を考えると少し同情してしまうが、自分の肉体を諦めなければならぬなんて・・・。

そんなこんなでどれ程の時間が経つたのだろう。1分か2分か、それとも2日か3日かが経過した頃に、タツソー（僕の国と同じで名字が先で名前が後だから）が僕の肉体にかざしていた手を下した。一瞬の後、僕の肉体が輝き始め、頭天边から糸状の何かが伸びてきて、僕の頭に繋がった。しかし、その糸は細く光も弱々しく、今

にも切れてしまいそうだ。

すると、いつの間にか彼の右手には腰に下げられていた剣が握られており、

剣が強い光を発し始めた。

殺される？

さっきの話は嘘なのか？

糸についての説明もなしに成仏させられるの？

彼が剣を構えながら言った。

「じつとしていてくれよ。」

「の、呪ってやるうゝゝ！」

この期に及んでも諦めきれない僕からの、せめてもの抵抗を、彼は思いつき無視して剣を振り下ろした。

反射的に目を瞑る。

・ ・ ・ ・ ・

じわじわと背中を上ってくる寒気に驚いて目を開けると、彼の振り下ろした剣は僕の肉体と精神体を結ぶか細い糸を一刀両断にしていた。

すかさず、切れた糸の端それぞれを両手で握り、また彼が輝き始めた。

イケメ（以下略）

そして、ニコニコしながら説明し始めた。

「いやあ、良かった良かった。一時的に君の精神体を肉体に戻した時に、精神体と肉体の結びつきが微弱だけど復活しちゃって。ああなると、肉体のダメージが回復すると共に結びつきが回復しちゃうから、なんとか結び目を見つけ出してぶった切れたよ。」

なんだってー！ー！？

じゃあ、相談と言う名の脅迫をした時は、まだ肉体に戻るチャンスがあつたのか！？

騙された・・・。

こんな外道を少しでも同情した自分が憎いよ！

「呪ってやる～～～！」

涙目で叫ぶ僕の声は彼以外の誰にも届かず、空しくこたえました。

「ほう、俺を呪うというのなら仕方が無い。怨念は悪霊化への第一歩だからな。今すぐ成仏させてやろう。」

そう言つて、彼はおもむろに僕（精神体）から伸びている糸を手から離した。

それまで気付かなかったが、彼が糸の切れ端を握っている間は感じなかった寒気が、

またじわじわと背中を上ってきたのだ。

「あと半時もせずに成仏する。まあ、成仏してくれ。」

もはや、腹黒さを隠そうともせずにニタニタと笑う彼に僕は何もすることができない。

なにせ、精神体の僕は自らをうまくコントロールすることができないのだ。

肉体が手術室からICUに移送される時に引つ張られてきたのはその為だ。

「その糸みたいなのが肉体と繋がっていないと、並みの精神体はすぐに形を保てずに崩壊してしまうんだ。精神体は肉体からエネルギーを摂取しているからな。ちなみに俺は特別だ。」

精神体だけで行動するには何かしら方法があるらしいが、タツツォーにもたらされた情報の中にはそんなものは一切なかった。僕に抵抗させない為に、あらかじめ与える情報を制限したのかもしれない。くっそー！

悔しいが、彼は精神体の僕にエネルギーを与えられるようなので、僕にできることは一つだけだ。

「申し訳ありませんでした。今後は真摯にシーマさんのご指示に従わせて頂きます。」

父より叩き込まれた処世術が一つ、”誠実な対応”を用いて彼に謝罪し、今後は彼に従うという旨を彼に示した。

「よし！」

彼はそう言つと、宙を漂っていた僕の糸の切れ端を再び握り、今度は反対の手に握っていた肉体の方の糸をパツと話した。

「肉体の方は、精神体と繋がっていなくても植物状態になるだけで

一応生きていける。ただ、そのままだと悪霊に取り憑かれることも稀にあるから念の為結界を張っておいた。じゃ、行くか！」

良く見ると、糸の切れ端に光るボールのようなものがくっ付いている。

本当に何でもできるんだなあと感心を通り越して呆れていると、彼が僕（の糸）を引っ張りながら上昇し始めた。

「待ってくれ！そこには天井が！

しかし、待たない！

そして、すり抜けた！

上にベットの裏が見える！

まさかすり抜けるのか！？

おじいちゃんの身体をすり抜けた！

また天井だ！

今度は看護師さんだ！うへへ。

はっ、また、天井が！」

ここまで実況した所でタツツオーのこめかみに青筋が浮かび、文字通りギョーンと音を立てて加速した。

あばばばばばばばっ！

色々なものをすり抜けながら病院を突き抜けた一人とおまけは、空高くを目指し昇り始めた。

蠟で固めた翼はないので落ちることはないが、急激に遠ざかっていく僕の肉体を思い、

一筋の涙を流した。グッバイ僕の身体。

だがしかし、まさかそのままこの世界ともお別れしてしまうとは予想だにしていなかった。

シャル ウィー スワップ？ 僕らを交換しませんか？（前編）（後書き）

どうも、お初にお目にかかります。
楽しんで頂けましたら幸いです。

ある程度の達成感を得るまでは、書いていきたいと思えます。
何かアドバイスがございましたら、ご遠慮なく頂けますと幸いです。

シャル　ウィー　スワップ？　僕らを交換しませんか？（後編）（前書き）

大したことはありませんが、ちょっとえっちな表現があります。

よい子はティッシュを鼻血止めにだけ使おう！

異世界に連れてこられてしまった立夫の冒険は波乱含みでスタートか？

シャル ウィー スワップ？ 僕らを交換しませんか？（後編）

物凄いスピードで地面から離れていくタツツオーに引っ張られ、これまたものすごいスピードで彼に付いていく立夫は、地球の大気の外に暗い宇宙が見えるようになってきた頃に不安になってきた。一体どこに行くのだろうか？

今までいた病院ならば、精神体と乖離して植物状態になってしまった患者も多いだろうに、そういった病棟には見向きもせずここまで来てしまった。

もしかしたら、僕らの精神体との相性が悪い肉体しかなかったのかな？ 下手をすれば外国人になってしまいうこともあるかもしれない。

せめて、政情が安定していて経済も豊かな国の裕福な家庭の子供になれるように祈っておこう。

しかし、タツツオーは一向に方向転換をしようとせず、ひたすらに宇宙へ向かって上昇していき、遂に地球は丸いんだなあと実感できる所まで来てしまった。

まさか、宇宙ステーションにいる宇宙飛行士になれちゃうのか？

いや、宇宙飛行士が植物状態になったらさすがに大騒ぎになるけど、ここ数日そんなニュースは見えない。

まさか、僕の為に誰かの精神体にご退場頂くことも難しいだろうし。でなければ、僕と肉体を繋ぐ糸が復活したぐらいで焦らなかったはずだもんな。

ということとは、僕は地球上で初めて地球外生命体と接触することになるのだろうか？

そして、宇宙人として生活していくことになるのか？

なんだろう。なつてみたいような、なりたくないような微妙な感じだな。

ついに堪え切れなくなつて彼に聞いてみることにした。

「ねえ、タ、シーマさん。一体どこまで行くのかな？そろそろ太陽に着いちやうよ。もう後ろを振り返らない限り一面が太陽だよ。あつちにもものすごく大きなプロミネンスも見えるんだけど。あれ、地球を余裕で飲み込んだじゃうぐらい大きいらしいね。」

「その太陽に用があるんだよ。」

「太陽に？ということとは、太陽には宇宙人がいたのか……。クマムシよりもタフな環境でよく生きられるなあ。で、どんな感じなのかな？その、太陽にすんでいる人は。」

「はあ？太陽に人が住める訳ないだろう。君には俺の肉体に入つてもらふんだよ。」

「シーマさんの肉体に？太陽にあるの？異世界においてきたはずじゃ……。？」

「だから、その異世界に行くんだよ。あとちょっとだから待つてな。」

と言つてからすぐに、太陽の近くに到達したタツツォーは、移動を止めて太陽に向かって僕の糸を握っていない方の手をかざした。

すると、紫色に光る同心円状の線が真つ赤に燃える太陽の表面？に浮かびあがり、複雑な紋様を描いていった。まるでアートだ。

そのアートは、ウサギが餅つきをしている姿のように見えたが、「それは月でしょう!」というのんきなツツコミを入れる暇はなかった。

タツツオーは、小声で「よし」と呟くと、物凄いスピードで光る円

どんどん近づいてくる真つ赤な炎に、地球から飛び上がる時は全く感じなかった恐怖が揺り起こされる。

すり抜けるとわかっていても怖い物は怖いのだ。

「ギイイイイアアアアアアア——！！！！！」

炎の中に呑み込まれる瞬間、僕らの精神体は紫色の光に包まれて消
失した。

その日、地球の世界各国で太陽を観測している機関が、太陽表面に異常な黒点活動を確認したが、誰もその真相は知る由もなかった。

「アイヤアアアー！！！」

叫び声が途切れる間もなく紫色の光の中から飛び出した立夫は、今度は激しく上へ下へ乱舞する膨大な量の気泡とそれらに乱反射する真つ赤な光に囲まれ、またもや混乱に陥つた。

水の中にいるの！？い、息が・・・。

水面を目指して得意のクロールをしようとしたが、体がうまく動かない。そもそも水面があるのかもわからない。

それでも生き残る為に酸素を求めて顔を赤くしたり蒼くしたり足掻いていると、タツツォーが真剣な顔で立夫を見て行った。

「まさか！転移陣に何か問題でもあったのか！？それとも、一般人の精神体では異空間転移に耐えられなかったのか！？」

精神体・・・？そういえば、今は酸素なんて必要なかったか・・・ハハ・・・。

「ごめん、精神体だつてことを忘れてたよ。こんなこと初めてなもので・・・。」

さすがにタツツォーも立夫を責めることはしない。何せ振り回しているのは自分なのだから。

それから、タツツォーはゆっくりと移動を再開し、立夫は相変わらず引つ張られながら周囲を観察していた。

タツツォーが「異空間転移」と言っていたから、既に彼の元いた世界に到着したようだ。

そのまま引つ張らるままにされるのも退屈なので、思いついた疑問を尋ねてみることにした。

「あれ、太陽だね？水の中に太陽があるなんてなかなかユニークな世界だね。」「そうかな？君の世界の太陽の方が迫力があって面白いと思うけど。」

どうやら、あれは太陽で間違いないようだ。確かに僕の世界の太陽と比べるとダイナミックさに欠けるな。

「ちなみに、この世界では宇宙に水が満たされているの？」

「いいや、宇宙なんてものはないよ。それに、ここは太陽の通り道で、太陽の寢床と呼ばれている所なんだ。」

寢床？

寢床ということは、この世界は今、夜なのかな？

水の中に太陽の寢床があるのなら、起床したら陸地を照らす位置に昇るのだろうか。

文字通り海から日が昇り、海へと沈むという構図を想像したら、何となく天動説を基にした世界地図を思いだしたので、また尋ねてみた。

「世界の端っここから海が流れ落ちてたりするの？」

「うん。それがここに流れ込んでくるんだ。もう少しで抜けられるよ。ついでに日の出をみせてあげよう。」

世界の端っここから落ちた海の水が流れ込んでくるということか？

世界の下に水瓶のようなものでもあるのだろうか？

立夫は「異世界ってすごいな。」と呟きながら水中から抜け出したら目の飛び込むであろう景色を息を呑んで待った。

だんだんと、渦巻く水面が近づいてくるのがわかる。

やはり上から水が流れ込んでくるようだ。

そして、水中より抜け出して頭上を見上げた立夫の目に飛び込んできたものは、何もない暗闇であった。

立夫は、水瓶に滝のように流れ落ちる海水や、陸地の裏側などが見えると思っただけに、少し戸惑いながら周囲をキョロキョロしてみた。

すると、足下に大きな川が見えた。

たったいま、抜け出てきた水溜り（太陽の寢床）に流れ込むように、二つの川が水溜りを挟んで真一文字に繋がっている。その大河に何本もの滝のような激流が側面から直角に合流しており、激流の流れていない箇所には陸地が見えている。

ちょうど大河を挟むように片側は白っぽい色、反対側は黒っぽい色の地面が広がっており、妙にくっきりとしたコントラストをなしている。

他に何か見えないか遠くを見渡そうとしてみたが、太陽がまだ水溜りから出てこない為、暗くて見通すことができない。

タツツオーが水溜りから少し離れた大河の上で停止したので、ここで日の出を待つようだ。

先程の白い地面側が右手、黒い地面側が左手に見える。

水溜りがどんどんと真っ赤な輝きを増し、気泡の勢いが活発になっていく。

気泡が白い地面側と黒い地面側に割れるように飛び出してくることに不自然さを感じたが、そんなことよりも日の出が待ち遠しくて、あまり深く考えなかった。

そして、水溜まりを内から照らす光が最高潮に達した時、大規模な水蒸気爆発を起こした太陽が立ち込める水蒸気の中から顔を出した。精神体であるにも関わらず、立夫は間近で見る太陽の強烈な光線を受け止めきれなくなり、目の痛さに顔をそらした。

太陽は物体だけでなく、精神体に対してもなんらかの影響力を持つ

のだろう。

確かに立夫の元いた世界でも晴れの日ば元氣になり、雨の日ば落ち込んだ気分になりやすかったことを思い出していた。

そのまま空高く昇っていくのであろうと思っていた立夫が太陽の進行方向に目をやると、太陽の光に照らされて、四角い物体が太陽の通り道を遮っていることに気がついた。

太陽よりははるかに小さいが、やはり巨大な立方体が浮かんでいるのだ。

その立方体の太陽側の面に丸い円が描かれており、その円の中には二等辺三角形の形に彫られた溝が走っている。立夫のいた世界で言う「くさび形文字」のような感じた。

その箱型の何かに、あと少しでぶつかってしまうというところで、太陽が動きを止めた。

「まさかあそこが太陽の最高高度なの？低すぎやしない？」

立夫は異世界とはいえ、あまりに陸地に近すぎる太陽を見て、この世界の人々の過酷な生活環境を想像した。

「もうすぐ動き出すぞ。」

タツツオーが答えるや否や、太陽が停止していた場所から水平に動き出した。

その方向は、立方体に刻まれた二等辺三角形が指し示している方向でもあった。

まさか……。と思いながらも僕は疑問を口にする。

「あの四角い物体は、太陽の進行方向を示しているの？」

「その通り、通称は太陽の道標みちしるべと呼ばれているんだ。太陽はあの四角の中に刻まれている三角形の方向へと昇っていくんだ。そして、俺はあれの為にこれまで勇者として戦ってきたのさ。」

自分で言っただけで思いついたのか、急にニヤニヤして気持ち悪い。何か大切なことを聞いた気がするが、話を整理する前にタツツォーより衝撃的な事実を突きつけられることになる。

「そして、これから立夫、君が俺を守るために戦うかもしれないな。」

はい？今なんて言った？

何で肉体を乗っ取られて異世界に無理やり連れてこられただけの僕がそんなことするんだ？

と、そこまで考えたところで僕が精神体に移らせる肉体についての閃きが脳みそを貫いた。僕がこの世界に連れてこられた理由は……！

「まさか、タツツォーの身代わり！？」

ニヤけた表情を急に引き締めたタツツォーは大きくうなずいた。

「うん。僕がいなくなると困る人も多いからね。君はこの世界の人々の希望の光になるのさ。」

そして、即座に吹き出している。

自分の義務を放棄した挙句、夢へ一直線に向かう好青年の肉体を乗っ取った上に、更に肉体から追い出された被害者である僕にその義務を押し付けるだって？

くっ、命を握られていなければグアバットをお見舞いしてやりたい気分だ！！

身を焦がすような悔しさを腹の中にしまい、肉体を手に入れるまでは表面上だけでも従っていないくては、生命の危機を脱することができない。立夫は面従腹背を決め込み、苦笑いで相槌を打ちながら本題を切り出した。

「それはわかったけど、タツツオーの肉体はどこにあるんだい？」

「まあまあ、落ち着きなつて。すぐに案内するから、まずはこの世界をよく見てほしいんだ。」

といって、右手を差し出してきた。僕は反射的に右手を差し出し握手をしてしまった。

すると、またしても大量の情報が脳みその中を駆け巡った。

最初に握手をした時、タツツオーは記憶のほんの一部だけを僕に与えていたようだ。

そして、今回も世界の仕組みや情勢についての記憶のみが流れ込んできたことがわかる。

2度目の経験である情報の奔流に体（精神）が慣れたのか、素早く立ち直った僕はこの世界についての記憶を整理し始めた。

こちらの世界の人々は、精神体が媒介を通して現世に干渉することを「日常生活」とし、人が起こす全ての現象は精神体の意思が働きかけた結果であると考えられている。

そして、肉体を媒介として現世に働きかける行為をヒジクス、精神エネルギーを媒介として現世に働きかける行為をサイキス（魔法のようなもの？）と呼んでいるらしい。

ヒジクス、サイキスはともに精神の意思を起点として発生する行為である為、強い精神力を持つものは、必ず何かしらの能力に秀でる

らしい。また、高い精神力を持つ人間には死後に太陽の国（天国）への門戸が開かれるという信仰が広まっており、その教えを信じる人々は清廉潔白で真面目を良しとする人生を送ることに一生を費やす。

僕におあつらえ向きの世界かもしれないけれど、宗教というのがちよつと引つ掛かるな。

あとは、強い精神力があれば色々できるのか・・・。

立夫の育った国は宗教というものをアクセサリー程度にしか思わない価値観の人々が多勢を閉めていた為、信仰心を持って生活を送る人々を理解できないようだ。

深く考えることはやめ、タツツオーに見えないように手をグーパーしながら、気づいたことを質問した。

「もしかして、太陽の寢床で移動スピードがゆっくりになっていたのは僕の精神に引つ張られたせい？」

「よくわかったね。きっと君の【水には摩擦がある】という無意識レベルの認識が精神体の移動を阻害していたんだと思う。人の無意識というものはかなり強い干渉力を持っているからね。というか、独りなら君のいた世界でも地球から太陽に到達するのは一瞬だよ。」

ふうん、と納得し、続いて世界の構造について整理し始める。

まず、今僕の足元に見えている白と黒の陸地は、世界の側面だということだ。

この世界は、二つの世界が文字通りコインの表と裏のように存在しており、表をイナーズ界、裏をザーズブルー界と呼んでいる。ちなみ

に、タツツオーはイナーズ界で生まれ育っている。

そして、二つの世界の果てから流れ落ちてきた海水が大河へと流れ込み、その大河は太陽の寝床へと流れ込むようになっていく。

つまり、足元に見えている陸地の果てで90度回転すると、そこにはそれぞれの世界が広がっているということだ。

白い陸地の方がイナーズで、黒い方がザースルーであり、太陽はイナーズの方へと昇っていった。

この二つの世界は、互いの世界を行き来する方法がほぼ皆無であり、古文書や古代遺跡に二つの世界間における交流の記録の断片が残っているのみである為、イナーズ界の人々には「そういう異世界があるらしい」ぐらいの認識しかなかった。

それが20年前のある日を境に、ザースルー大連合を名乗る組織がイナーズに界出現し、>>日照権の奪回<<を大義名分に掲げてイナーズ界の各国に宣戦を布告をし、それと同時に有名なサイキス使い（サイキール）を誘拐し始めたことで、その存在を知ることになったのだという。

その日照権というものに、先ほど目にした太陽の道標が係わってくる。

太陽は、1日の初めに太陽の寝床を北壁（北極）から抜け出すと、太陽の道標まで進み、そこでなんらかのサイキスによって二等辺三角形の二等辺が交わる頂点の方向を確認してその方向へと進み、南壁（南極）に同じく設置されている太陽の道標に従い、太陽の寝床へ入っていくらしい。

つまり、太陽はイナーズ界のみに対してその光を照らすのだ。

ザースルー大連合の声明によると、1000年以上の昔、太陽は二つの世界を照ら軌道を巡っており、二つの異世界を行き来する方法も存在し、交流していたそうだ。

しかし、当時イナーズ界に勃興した「太陽の信徒」という熱狂的な新興宗教の教祖が、「このまま太陽が二つの世界を照らし続けているとそのが涸れ果て、暗黒の時代が始まる」という世紀末的預言を喧伝し始めた。当時、大地震や海流の大変動という大規模な自然災害が続発していたイナーズでは、太陽の信徒の預言が瞬く間に広がっていった。たいした時間も掛けずに、太陽の信徒の影響力がイナーズ界で最大に達した時、当時最大のサイキールと名高かった教祖のアレク・ダーズマによって作られた太陽の道標を世界中から集まった高名なサイキールの協力を得て太陽の軌道上に固定し、太陽の軌道を操ることで二つの世界の中間点となる重力の壁、その中心にある太陽の寝床へと軌道を変更させたのだそうだ。

結果、イナーズには太陽の恩恵が降り注ぎ、ザーズルーには暗闇の時代が訪れた。

ザーズルーは日光の恩恵を殆ど享受することができず、わずかに日光が漏れてくる北壁（北極）と南壁（南極）付近の土地に貼り付くような過酷な生活を強いられてきたという。

それから1000年の時間を掛けてようやくイナーズ界への交通手段を築き上げ、1000年の恨みを晴らして日光を取り戻すべく宣戦を布告した。

この声明にイナーズ界の人々は動揺したが、太陽の信徒は「太陽の子教団」と名を改め、依然として世界最大の影響力を有していた。その為、ザーズルー大連合の主張を真つ向から否定し、「ザーズルーこそが太陽を破壊せんとする悪魔である」という声明を発表して世界各国に徹底抗戦を呼びかけ、二つの世界による異世界大戦が始まったのだ。

その戦争の最中にタツツォーは生まれ、類稀なサイキスの力を有していたことから太陽の子教団に引き取られて世界を救う太陽の子（

勇者」として育てられた。これまで幾度と無く死線を乗り越えてきた彼は、世界の行く末を決める重要な戦いの中にありながらもイナーズ界の各国が表向きだけ一致団結したように見せ、裏では少しでも他国より優位に立つべく足を引っ張り合う現実を目の当たりにし、戦い続けることに疑問を抱いてしまった。

疑問は徐々膨らみ、欲にまみれた政争をやめようとしなないイナーズ界の為に戦う自分の存在意義さえわからなくなってしまい、終には出奔してしまったのである。

彼の気持ちはわかるが、その世界にシーマ・タツツオーとして放り出される僕のこととはどうお考えなのか、ぜひとも心中をお聞かせ願いたい。

以前記憶を流し込まれたときよりも強い同情を抱くとともに、彼の矛盾した行動を理解できずにいる立夫は、「いつそザーズルーの手先になってもなつてやろうか」などとブツブツ呟きながら、太陽が白い世界イナーズに昇っていく様をボーッと眺めていた。

それにしても、この世界はイナーズとザーズルーの大地の色が白黒で、オセロの石みたいだなあ。ひっくり返せたりするんじゃない？ ひっくり返してやろうかな・・・フフフ。

異世界に連れてこられるだけでも困惑している立夫は、どちらの主張も眉唾な戦争の中心人物に乗り移らされるといふわけのわからない状況に、混乱を通り越して達観したような表情を覗かせ、しかし、鈍く闇い（くらい）光がその目に宿っていた。

それからあつという間だった。

移動を再開したタツツォーは先ほどとは比べ物にならないスピードで空を飛び、ほんの一瞬で、彼の肉体が眠る険しい山脈へとたどり着いた。

そのスピードに彼自身が驚いて立夫の様子を鋭い目つきで観察していたので、立夫は惚けて「色々わかったら、スッキリして身軽になったようだよ！」などと言い、誤魔化していた。

世界の果てで海水が落ちていく様を眺めてみたいと思っていた立夫は少し残念な気持ちになったが、ある目的を抱えていたので、そちらに集中していたのだ。

立夫は自身の精神をコントロールし、「自分は軽い！羽より軽い！」と強く思い込んだ結果、タツツォーの移動を補助することに成功したのだ。

立夫、恐るべし。グアバット炸裂の時は近いのかもしれない。

「俺の肉体はあの山にある洞窟で眠っているんだ。」

そう言っ指差した山を一瞥すると、何やら険しい表情で山の中腹辺りを眺めている。

立夫も釣られて中腹あたりをじっと見てみると、何やら山の表面を周囲の風景にほぼ溶け込んだ塊がモゾモゾと動く影が見える。

「もう嗅ぎつけられたか・・・急ぐぞ！」

タツツォーはモゾモゾ動く影から100Mも離れていない茂みの中へと移動し、ある大木の根元に着地？した。その大木の周辺は茂みに覆われていて周囲からはなんの変哲も無い大木にしか見えないが、根元の地面には根っこに囲まれるようにして人が屈めば通ることの

できるサイズの穴が開いていた。

その穴の中からは微かに光が漏れているようだ。
タツツォーは周囲の茂みに手をかざして何かをしてから穴の中に入っていた。

狭い穴の中へ潜り、3Mほど進んだところに明らかに人工的に造られた直方体の空間が広がっており、空間の正面にある土で作られたベッドのような台の上には目の前で光っているタツツォーと瓜二つの人の肉体が横たわっていた。そして、部屋の中を照らす光はその肉体から発せられていた。

精神体だけだと思ったら、肉体までイケメンフラッシュしちゃうとか、さすがは太陽の子だなと、呆れながら眺めていると、タツツォーが満足げに呟いた。

「よし、結界は正常に維持されていたようだな。」

そういつて、精神体のタツツォーが肉体のタツツォーに手をかざすと、肉体を包んでいたイケメンフラッシュは、ガラスが割れるように発散して消えていった。

光り輝く肉体で今後どうやって生活していこうか途方にくれていた立夫はタツツォーに見えないように胸を撫で下ろした。

「もう時間が無いから、一気に決めるぞ！」

タツツォーは、勢い込んで自分の肉体の頭を掴むような素振りを見せると、コードを引っ張るように光り輝く綱のようなものを引き出

した。

あれが精神体と肉体を結びつける糸だということは知っていたので、驚きはしなかったが、立夫の肉体と精神体を繋ぐ糸よりもはるかに太く頑丈をそうなそれを見て、繋がったら二度と離れられないかもしれないイメージが脳裏を掠める。だが、その瞬間こそが彼に一矢報いる最大のチャンスだと悟った。

イメージトレーニングは短い時間であったが何度も繰り返してきた。何度も成功のイメージを想像し、自分の動作の軌跡に無駄の無いことを確認する。

僕の憂さを晴らす為に。

これから迷惑を掛けるであろう元いた世界の人々の為に。

少しでも彼の傲慢がなくなるように。

親友の憧れるグアバ仮面の力を借りて。

あらゆる感情を胸に抱き、余所見をしているタッツォーに必中の一撃を。

そこで、僕の頭から引き伸ばされた糸と、タッツォーの肉体から伸びている綱が光を放ちながら繋がれた。

今だ！食らえ！ローリング・グアバット！

タッツォーがこちらを振り向く数瞬間前に、立夫は自らの精神体を踊らせ彼の死角へと飛び出した。

イメージ通りに跳躍した精神体はタッツォーの右後方へとすり抜け、彼に背中を向けるようにひねった上半身に連動してバネが跳ねるように弧を描く右足。

その右足に対して精神体を直接攻撃するイメージを付加しながら振

り抜いた。

グアバットは見事にタツツオーの延髄に決まり、衝撃を受けたタツツオーは崩れるように倒れて・・・くれなかった。

何事も無かったように悠然と立夫の方に振り返ったタツツオーの顔はかつてないほど柔和な笑みを浮かべていた。

「それが君のイメージのバイアスだ。残念だったね。」

愕然とする立夫の精神体は、タツツオーに触れられていないにも関わらず、縦横無尽に振り回された。

「精神体で精神体を直接攻撃する必要なんて無い。ただ強い意思とイメージを持って干渉するだけでいいんだよ。俺が君の精神体の繋ぎ目を持っていたから勘違いしたようだね。それじゃ俺はそろそろ行くね。」

立夫は目を回しそうになりながらタツツオーの言葉を聞いていると、ピタッと静止させられてタツツオーの肉体に叩き込まれた。

全身を電流が貫いたような衝撃が走り、僕は気を失った。

・
・
・
・
・

どれぐらい気を失っていたのかわからない。

気がついて目を開くと、僕の傍らには見知らぬ女性が立っていた。
ん？誰だ？看護婦さんかな？見覚えがあるようなないような……。

一時的に記憶が混濁していた立夫は、ここが元いた世界の病院のベッドの上だと勘違いしていた。

しかし、病院にしては周囲に広がる景色がゴージャス過ぎる……。立夫は、よくわからないまま起き上がろうとしたら、首に何かがつ掛かって「グエツ」と声を上げた。

起き上がれない。

試しに手足を動かそうとするも、そちらも何かに引っ掛かって動かせることができない。

どうしたって言うんだ？

徐々に霞が取れてきた頭で考えながら、目だけを動かしてもう一度周囲を確認すると、傍らに佇む女性は上気した顔で目を潤ませながら立夫を見つめて呟いた。

「ようやく……ようやく私たちは一つになることができますね……タッツォー様……」

彼女の「タッツォー」という台詞に我に返った立夫は、その女性の正体に気づいた。

立夫とタッツォーがであう切欠を作った、謀略を仕掛けた王国の王女である。

たしか名前はリーサ、小国フルガート王国の第一王女で、フルネー

ムはフルガート・ドル・リーサだったはずだ。

ということは、この肉体に乗り移らされる前に山腹で見た、モゾモゾと動いていた影は王の放った山狩り部隊であり、気を失った立夫はタツツオーに見捨てられ、王国に拘束されてしまったのだ。

やばい！！僕の貞操が政争に利用されてしまう！！

しかし、立夫の体はしっかりと拘束されているようで、全く身動きを取ることができない。

それでも何とかしようともがいていると、リーサが身にまとっていた純白のネグリジェのような衣服の肩紐に手を掛け、スルリと脱ぎ落とした。素晴らしいプロポーズが立夫の目の前に晒され、彼は鼻の下を若干伸ばした。

一糸纏わぬ姿となったリーサの顔がゆっくりと立夫の顔に近づいてきた。

潤んだ瞳を睨り、唇を少し突き出した彼女の表情は、この異常な状況に無ければ愛おしいと感じられるほど可愛かった。

しかし、このままなし崩し的に政治の切り札にされるわけにはいかない！

なんとかしなければ！！

徐々に迫ってくるリーサに目を釘付けにされながら、立夫はタツツオーの言葉を必死で思い出そうとしていた。

シャル　ウィー　スワップ？　僕らを交換しませんか？（後編）（後書き）

もし、続きを読みたいと思って頂けたあなたには、私から尽きるこ
との無い愛を贈ります。

次回をお待ちください！

ダンス トゥー ザ リップ（前書き）

お久しぶりです。

お待たせしていた方がいらっしゃったら、お待たせしました。

今回は、立夫が本気でやばいです。あいつ、無茶しやがって・・・。

ダンス トゥー ザ リップ

高校入試の結果発表会場から親友らと笑顔で帰宅する途中に瀕死の事故に見舞われた横綱立夫。

彼が病院の手術室の空中で目覚めると、目の前にタツツォーと名乗るイケメンが登場する。

” 別人として生きるか、その場で成仏するか？ ”

突然理不尽な交渉を突きつけられたが、生きることを選択した彼はタツツォーの住む世界イナーズへと攫われてしまう。

そして、タツツォーの肉体に乗り移ってしまった立夫が気づくと、目の前には今にも襲い掛からんばかりに上気した美女の姿が……

クノーシタサーカス参上！

ここはイナーズ最大の大陸クーター大陸中西部にある小国ワーコン。南部に存在する超大国に自分達の領地を侵されぬ為に寄り集まった合従連合【アリアン】連盟国の一つである。自国に接する同じく【アリアン】連盟国の貿易国家ゴースアを行き来する行商人達が国を通過する際に落とす通行料と宿代だけが収入源の特徴のない国だ。今、その特徴の無いはずの国の首都が人で溢れ大いににぎわっていた。どうやら大きな催しが開かれているらしい。その為、近隣の国を冒険していた【太陽の子】シーマ・タツツォーが、とある国で失踪したという噂は全く相手にされず、皆口々に催しについてあてもないこうでもないと盛り上がっていた。

その首都であるワタオの中心街から少し離れた広場にサーカステントがあった。

どうやら、この世界を巡業する有名サーカス団のようで、客席は満席。大歓声の中でピエロが滑稽な芸を披露し、美男美女が空中を舞い、恐ろしい獣・・というよりドラゴンを見事に操るドラゴン使いがドラゴンの口の中から炎とともに飛び出してくる。それらの曲芸一つ一つがサーカス団員それぞれの実力を一流のサイキールであると納得させる魅力的な公演内容に、観客は魅了されテントの中は熱気と興奮に包まれていた。

そして、閉演の時間があと少しと差し迫ったところで、予定調和のトラブルが発生する。

先程までドラゴン使いと共に曲芸を披露していた身長が10メートルは(メートル×2)あるドラゴンが、役目を終えて観客から見える位置に設置してある牢屋へと連れて行かれる時に、その主であるドラゴン使いを尻尾で殴り飛ばしたのだ。

隙を突かれたドラゴン使いは、計算されたように舞台のと真ん中へと飛ばされ気を失う。

それまで一輪車や大玉に跨りファイアーボールをお手玉したり、自ら作り出した雷で黒コゲになっていたピエロ達が、慌てたように舞台を縦横無尽に逃げ惑い、空中を舞っていた美女たちは悲鳴を上げて打ち震えている。

「ギョーエエー！助けて助けて。」

緊張感が皆無のピエロたちの悲鳴が客席の悲鳴交じりの歓声を打ち消すように響き渡り、観客がパニックを起こさずにショーであることを意識させる。

主を打ち倒したドラゴンは、客席に向かって種族特有にして強力なサイキスであるブレス(竜の咆哮)を放たんと胸を大きく反らし、口から赤い光を漏れさせながらサイク(ファンタジー小説に登場する「魔力」のこと)を大きな肺に溜め込む。

客席は恐怖に顔を引き攣らせるものが半分、これから起こるであろう最大のショータイムに心躍らせるものが半分であった。しかし、観客は誰も逃げ出そうとせず、客席から悲鳴やら歓声やらを上げているばかりである。

舞台と客席の間には、何も遮るものが無いように見えるが、実は超一流のサイキールによって防御結界が張られている為だ。余談だが、結界を張った張本人は、先ほど雷の曲芸で自身を黒コゲにしていたピエロだったりする。

そして、テントの中の悲鳴や歓声が木霊する中、阻むもののいないドラゴンが仰け反った体を勢いよく前傾させて炎のブレスを炸裂させた。

テントの中は赤く禍々しい光に満たされ、主に貴族などの特権階級が占めている客席に向かって強烈な炎の爆発が迫る。もうブレスではなく、爆発が迫ってくるのだ。

初めてこのサーカスを鑑賞していた貴族の子弟が、腰を抜かしたり粗相をしてしまったとしても、それを嘲笑うことはできないだろう。迫力の砲撃は、しかし、客席に届く寸前に急激に熱量を失い凍りついた。凍結したそれは真っ赤に燃え盛っていた時とは対極を成すように真っ青に凍り付いている。

何者かのサイキスが行使されたであろう舞台は、全てを燃やし尽くしそうな灼熱地獄から万物を永遠に閉じ込める絶対零度の世界へと姿を変えていた。そのあまりに圧倒的な変化に客席はシーンと静まり返る。

そこで初めて、観客は気づく。客席にあと3メートル（メートル×2）の所で凍りつき停止した炎のブレスと客席の間に立ち、右手を凍りついた炎のブレスの方へかざし、左手を観客席にかざして万歳のような姿勢で佇んでいる美女に。どうやら、右手で炎のブレスを凍り

つかせ、左手で自身のサイキスの余波が客席へ及ばないようにしているようだ。つまり、結界が張られていても何もしなければ客席に少なからず被害が発生するということだ。

それほどの強大な力を発揮した人物は、サーカス団の副長にして、世界屈指のサイキールであるゴゴ・クノータ（ちなみにファーストネーム制の国出身）であった。彼女の冷たくも心燃え上がらせる微笑に、観客は絶叫のような歓声を爆発させ、それを合図に一陣の風が吹き、凍りついたブレスは砕け散っていった。

炎のブレスは、単純にして複雑なサイキスの奥義である。簡単に言うと、作為的な粉塵爆発だ。

まず、ドラゴンの肺で発火性の極小サイク粒子を大量生成し、吸い込んだ空気と共に対象に向けて高速噴霧する。次に噴霧されたサイク粒子をサイキスによって任意の範囲――今回はドラゴンの口先を頂点に円錐状――に急速に拡散させる。最後にサイク粒子が最適の爆発密度に拡散した瞬間に一粒だけ発火させ、燃焼の連鎖反応によって大規模の粉塵爆発を発生させる。これらの作業をほんの一瞬で成し遂げるのだ。

ドラゴンが吐き出したブレスを、サイキスで作り出した極低温環境によって凍りつかせてしまった。つまり――サイクは凍らないので――酸素を凍結させてしまったことになる。いくらドラゴンのサイクが強力であったとしても、燃焼に必要な酸素を凍結されてしまえば、無用の長物である。

ただ、それだけではドラゴンの炎のブレスを防ぐことはできない。すでに発生した爆発によって発生した爆風や爆音を凍らせることができないからだ。いくらテントとはいえ、サイキスで強化された閉鎖空間内で爆風が縦横無尽に吹き荒れれば、サーカス団員が無事ではいられないため、炎のブレスの周辺にいくつもの真空空間を作り出し、爆風と爆音のほとんどを吸収させたのだ。

そして、最後に砕け散った氷の中から開放される可燃性サイク粒子が何かの切欠で燃焼しないとも限らない為、突風を起こしてそれらを換気窓から外へと放出した。

それらを一瞬で実現してしまうコゴ、恐るべし。まさに、世界最高レベルのサイキスが観客の眼前で披露されたのだ。

ちなみに、彼女はその高い実力と見栄えのする容姿のおかげで、王家やエリートからのプロポーズと軍やサイキス研究機関からのラブコールが年中舞い込んでいるが、とある理由で全て断っている。

話は戻る。

ドラゴンはまだピンピンしており、再び体を大きく仰け反らせ、今度はコゴに向かって炎のブレスを狙い撃った。

撃っては凍り、撃っては凍る。そんな光景を繰り返し、ドラゴンと互角以上に渡り合うコゴに観客の興奮度は高まっていくが、ドラゴンの暴走を止めるに至っていない。肝心のドラゴン使いは、コゴのサイキスの余波を受け、氷の結晶の中で安らかに眠っていた。

そんないつまで続くのかわからない状況に、ついに変化が訪れた。ドラゴンがブレスの連射を始め、コゴが次第に押され始めたのだ。一発の威力は落ちるが、それは街を消し飛ばすものからテントを消し炭にする程度になっただけで、危険であることに変わりはない。それまでは、コゴの前方10メートル辺りで凍らされていた炎のブレスが、ジリジリとコゴに迫り始めた。

そして、1メートルを切ってしまいコゴに危険が迫る。世界屈指のサイキールでもドラゴンには敵わないのかと観客の一部が俄かに心配し始めた頃、突然サーカステントの中に馬鹿でかい音楽が流れ始めた。

甲高く響く間弦楽器と打楽器の織り成す勇ましい音楽が演奏される中、モクモクと焚かれたスモークと瞬くスポットライトを浴びながら一人の男が現れた。男はゴテゴテに装飾の施されたキンピカの甲冑に身を包み、光を凝縮したような刀身の剣（ラ ト イバーに似ている）を高々と掲げ、なぜか天井から降りてきた。

といったも空を飛んでいるわけではなく、舞台の端のほうでピエロ2人が必死に回している車輪に繋がれたロープを片手で掴んでいるようだ。観客はその滑稽な様子を笑い、ドラゴンは律儀に甲冑の男が降りてくるのを待っている。

そして、地面に降り立つとコゴを背後に従えてドラゴンに対峙し、剣を突き出して口上を始めた。

「我こそはクノーシタ大サーカス団団長にして、『竜殺し』のゴイル・クノーシタである！平和を乱す悪辣なドラゴンめ！我が【光の剣】の鎧にしてくれる！」

この言葉を合図に、ドラゴンは再び炎のブレスの連射を始める。後方にあるコゴのサイキスで援護を受けたゴイルは、いつの間にかピエロ3人で組まれた人間櫓の上に乗し、勇猛果敢にドラゴンの懐へと向かっていった。

ゴイル・クノーシタ。イナーズ史上初のサイキールサーカスであるクノーシタ大サーカス団を設立した彼は、コゴの父親でもある。サーカス団を旗揚げする前は超一流の冒険者として世界各国を巡り、その頃に実際に「竜殺し」の称号を得ていた。冒険者を引退した時には各国で号外が乱れ飛ぶほどの実力と影響力を兼ね備えた彼が、サーカスを設立した切欠は、聞く人が涙を流す一大叙事詩とも言われているが、今はショーを楽しむ時間である。

ゴイルとピエロ達の一団が舞台の上をチヨロチヨロと疾走する。時々、炎のプレスが一団に直撃して黒こげになるが、決してピエロ達は足を止めず、果敢にドラゴンへと駆けていく。そんなネバーギブアップな姿を見て、観客は爆笑から応援の歓声に変えたり戻したりしている。

そして、一団がドラゴンの懷に迫った時、ゴイルはピエロ櫓から大きく跳躍し、ドラゴンの遙か頭上へと舞い上がった。直後、ピエロ達にドラゴンの尻尾の横薙ぎが一閃し、舞台の端へと飛ばされていった。

もうなにがなにやらわからないが、お膳立て（？）は全て揃い、ゴイルが空中で剣を大きく振りかぶりながら叫ぶ。

「今こそ決着のときだ！覚悟せよ！」

そして振り下ろされた剣がドラゴンに叩きつけられる。

ドラゴンはその攻撃を鱗で受け、至近距離にいるゴイルを切り裂かんと爪や牙で襲い掛かる。

ゴイルはそれらの攻撃を剣で弾きながら跳ね回り、鱗のない腹をめがけて切りかかる。

しかし、ドラゴンも一筋縄ではいかない。その巨体に似合わぬ軽快なバックステップで攻撃をかわし、炎のプレスを繰り返していく。

一進一退の攻防は続き、先ほどまでの三文芝居からは想像も付かない演舞が大迫力で繰り広げられる。

観客の誰もが、両者の鮮やかな動きに見惚れてため息を漏らす。

それほどまでに美しい、流れるような動作による決闘が目の前で繰り広げられていたのだ。

しかし、戦いは永遠に続かない。

やがて、炎のプレスを連発していたドラゴンの体力に底が見え始め、

動きが鈍ってきたようだ。

そのチャンスをゴイルは見逃さず、1対1の決闘を開始した時のようにドラゴンの頭上へと飛び上がり、光の剣をドラゴンの頭蓋に向けて振り下ろした。

刹那、テントの中を眩い光が埋め尽くす。この光の中では誰もが目を開けてはいられない。

やがて光が収まると、舌を出して倒れ込んだドラゴンと、その上に立ちって剣を頭上にかざすゴイルの姿が観客の目に入った。

「ドラゴン討ち取ったりい〜〜〜！」

ゴイルの宣言と共に一瞬鳴り止んでいた音楽が再び流れ出す。宇宙船を制御する人工知能が自我を持ちそうな壮大な音楽が”勝利”を観客に想起させる。

ドラゴンの周囲にはサーカス団員が集まっていた。

氷付けになっていたドラゴン使いもいつの間にか氷から抜け出して笑顔を振りまいている。

テントの中に響き渡る音楽がフィナーレを予感させる曲へと変わり、数人の歌い手達が歌を歌い、観客は賛辞の拍手を惜しまない。

ゴイルが兜を脱ぎ、ゴツイ顔を衆目に晒し、観客へ向かい頭を深々と下げた。サーカス団員達も同じタイミングで頭を下げる。その姿勢のまま暫くすると、コゴが団員を包み込むように氷のサイキスを展開し始め、あっという間に氷のドームが出来上がった。

「これにて閉幕！」

ゴイルの声が再び響いた時、氷のドームが大きな音を立てて砕け散る、そこにはサーカス団員の姿は無かった。

観客の拍手は、暫く鳴り止むことなく続いていた。

そして、サーカスの閉幕と共に太陽の子が消息を絶ったフルガート王国にて王国史上最大の事件が幕を開けることになる。

立夫、暴走の果てに

王妃リーサのあられもない姿に鼻の下を伸ばしながらも、その背後に見え隠れする陰謀を知っている立夫は貞操の危機を脱する為に、必死にタツォーの記憶を辿っていた。もしかしたら、彼にもたらされた記憶の中に状況を打開するヒントを見出すことができるかもしれないからだ。

しかし、まだ高校生にもなっていない立夫には、綺麗なお姉さんに迫られるピンク色イベントは刺激が強すぎた。どんなに考えようとしても全く頭が回らない。むしろ快樂のあまり、目が回りそうであった。

このままお姉さんに身を委ねてしまってもいいかもしれないな。

ダラリと鼻の下を伸ばし、欲望に負けそうになる。

しかし、リーサと関係を持つてしまうと確実にこの世界の政争に巻き込まれてしまう。

あの理不尽で腹黒いタツォーが嫌になっただけだから、きつとえげつなくてくだらないトラブル地獄へと一直線に突き落とされるに違いない。

その代価がたとえ次期国王の座であつたとしても、立夫の描く理想の人生とは大きくかけ離れたものに成り果ててしまう。

僕はただ、ささやかな幸せを感じられる穏やかな人生を歩みたいだけなんだ！

そんな余計なことを考えてしまったことが仇となつてしまった。

リーサの艶やかに煌めく薄ピンク色の唇が立夫の口を塞いだ。

刹那、襲いかかる官能的な感触。

柔らかく、且つ、プルップルンとしたプリンのような弾力が、立夫の思考力を根こそぎ奪い、頭がボーッとして体の芯からジワリと熱が広がっていく。

まさにへブン状態に陥つた立夫はリーサにされるがままに暫くキスを味わい続けた。

すると、立夫の唇を割るようにリーサの舌が侵入し、ガチガチに固まつた立夫の歯茎を優しく撫で回す。

ふわぁーおう・・・。

立夫の顎の緊張は即座に弛緩し、第二関門を突破した舌が立夫の舌を弄ぶ。

そして、まるで別の生き物に生まれ変わったような舌が口蓋をツツーとくすぐり、立夫の様々なボルテージが間欠泉のように駆け上がっていった。

嗚呼！天にも昇る気分だぁー。へへー。もう、どうにでもなあれー。

皮肉にも、立夫が抗うこと止めた瞬間にそれは起きた。

立夫はハツと気が付くと、艶かしい肢体を晒すリーサと拘束された忌々しいタツツォー（の脱け殻）が、濃厚なキスを交わしている光景を豪華なベッドの天蓋付近から見下ろしていた。

立夫の精神体は、彼の”昇天する”イメージを実現してしまったのだ。

僕のキスを返せ！

しかし、これまでに体験したことのない甘美な快感に我を忘れていた立夫は、自分が新たな宿主となった肉体を睨み付けてジタバタする。立夫の精神体と肉体は繋がっているので、現在進行形で快楽は全身を駆け巡っているが、そんなことは関係なかった。色惚けとは言ったものである。

うおおおおおおおー！！！！！！その続きは僕のモノだー！！！！

ようやく、精神体のある程度コントロールできることを思い出した立夫は、勢いよくタツツォーの横っ面を殴ろうと急降下する。

そして、タツツォーに覆い被さるリーサをすり抜けようとした時、事態は更に急転した。

立夫の目の前が一瞬だけ眩しい光に包まれ、視界が暗転したのだ。といっても、目を閉じていただけなのだが、何故目を閉じていたのか・・・？

立夫が目を開くと、眼前にイケメンの憎たらしい寝顔の一部が視界

を覆い、そのイケメンと唇を重ね合わせていた。

「うん？リーサの唇と比べてちよつと硬いけど、これもなんとも病み付きにな・・・ブベェッ！」

慌てて起き上がり、タツツォー（自分の肉体）の右頬を握り拳で殴り飛ばした。

すると、その衝撃が立夫自身（精神体）の右頬にも走り、ついでに殴った左手も痛くなったので、驚いてベッドから転げ落ちた。その時、咄嗟にシーツを掴んでしまったのだが、そのシーツに引っ掛かってサイドテーブルに置かれていた飲み物の入ったビンやコップ、香炉のようなものなどが落ちて割れてしまった。

その「ガシャン！」という音を聞いてか聞かずか、そこでようやく我に返ることができた。

さつき、リーサしゃん・・・の体を通過した時に、急に目の前がピカツとなって・・・。

先程の怪現象が起きた状況を思い出しながら、何となく体を撫で回していると、胸部に柔らかな感触があった。

「ん？この手に収まり切らない肉感のあるマシユマロのようなものは・・・ブピー！」

室内に置かれた大きな姿見が偶然視界に入り、鏡の向こう側にいる素っ裸のリーサがこちらを不思議そうな顔で眺め、直後に鼻血を噴き出した。

鼻血が美しいアーチを描き、眠ったように目を瞑っているタツツォ

ーの顔面を鮮血が彩る。

なんと、立夫は王姫リーサの肉体に乗り移っていたのだ。

「どうなってるの!？」

女性のヒステリックな声が部屋の中で響いてビクツとするが、自分の発言だと気付く。

とりあえず、おっぱ・胸部から手を離し、どうしたものかと思考を廻らせる。

まずは、どうして精神体が肉体から抜け出たのか、続いて、どのようにしてリーサの肉体を乗っ取ってしまったのかを考える。

タツツオーに与えられた記憶から、精神体を動かすには強い意思（イメージ力）が必要であることがわかつていたので、先程の心境を思い出してみた。

まず、リーサに唇を奪われ、「魂が天にも昇る気分」になった。

昇天のイメージを精神体が実行してしまったのだろう。

続いて、立夫の新しい肉体であるタツツオーとリーサがキスしている現場を目撃したことで、激しい嫉妬に駆られ「リーサは自分のものだ!!」と怒髪天を衝く勢いで怒り狂いながら自分の肉体に向かって殴りかかっていた……。

つまり、リーサを己が支配下に置こうという男、いや、オスの本能を剥き出しにしたことで、リーサを本当に自分の支配下に置き、乗っ取ってしまったのだ。

そして、タツツオーの話では、無理に他人に乗り移ると拒絶反応により肉体から弾き出されるはずであったが、一向にその気配が無い。

リーサの精神体はどこに行ったのだろうか？

ふと、そんな疑問が浮かんできて焦り出す。

「まさか、成仏なんて・・・してないよね・・・？そんなこと僕にできるわけが無いもんね・・・。」

冷や汗が背中を伝うような感覚に襲われながら、自分を落ち着かせる為にブツブツと呟く立夫は、気づかなかったことにして、頭を冷やして冷静になる。

父より学んだ処世術が一つ”臭いものに蓋をする”である。

怪我の功名とはいえ、不思議な力サイキスを使うこともでき、何となくであるが現状を打破する自信も生まれつつある。

あとは、自分の肉体に掛けられている拘束を解いてからこの肉体を離脱して、万全の体制を整えてからリーサの精神体をどうにかすればいいだけ！！

そう意気込んだ立夫は、まず自分の新しい肉体の各所を拘束しているゴツイ鉄の輪を観察する。

各々の鉄の輪は、肉体の下に敷かれている棺桶の底を外したような形の鉄板から継ぎ目無く生えており、鍵穴や蝶番などは一切見当たらない。明らかにサイキスによる干渉が実施されたのだろうと推測できる。鉄板も相当な重さなのだろう。立夫の肉体（受け入れた！？）が転がされたベッドが深く沈んでいた。

「1回逃げられたからって、やり過ぎじゃ・・・。ベッドに載せるのも大変だったろうに・・・。」

半ば呆れながら、なんとか自身の肉体を押さえつける鉄の輪を外すことができないか思索する。

思いつくのは「サイキスを利用する」という漠然としたものである。部屋の中を見渡しても役に立ちそうな道具は見当たらない上に、部

屋の外に出ようものなら王女としての振る舞いのできないリーサを目撃した人々は異変をすぐに察知してしまうに違いない為、それ以外の方法は考えようが無いのだ。

とにかく物は試しと自分の肉体の首を固定している鉄の輪を触り、色々とイメージしながら試してみる。

「外れる！・・・じゃ意味ないか。じゃあ、壊れる！・・・も効果なしと・・・。砕ける！・・・無理か。」

鉄の輪を排除するイメージが曖昧模糊としてしまい、どうにもうまくいかない。

そもそも、並のサイキール（サイキス使い）では、物質を砕いたり分解したりすることは難しく、それができれば一流と呼ばれるぐらいなのだ。イナーズに到着して間もなく拉致された立夫には知る由の無い事実ではあるが厳しい現実であった。

立夫も、自身の力の上限を決して高く見積もることは無く、自らの想像力の限界を見極めながら拘束を取り除く方法を模索する。

「自分の精神体を肉体から離脱することができたんだ。きっと何とかなえる！」

決して諦めたくない立夫は、自分の日常からイメージのしやすい現象を利用しようと考え、これまでの日常生活の様々な記憶を引っ張り出していく。両親や剛、摩耶などの親友たちとの記憶が蘇り、少し涙ぐんでしまったが、鑑賞に浸る時間すら惜しい。そうして頭を抱えているうちに、受験が始まる前に引退していた曲芸部での活動を思い出していた。

曲芸部の活動を入部から引退するまで順を追いながら思い出してい

くが、立夫の頭は「輪っかをどうにかする」という発想に縛られており、輪を使ったジャグリングなどしか思いつかない。しかし、そこに切欠はあった。

豪華な部屋を見回しながら考えていると、ベッド脇に落ちた香炉のような物が目に入った。先ほどベッドから落ちた時に道連れにしまったそれは、運よく一緒に落ちたビンが割れて飲み物がこぼれたことで、絨毯に引火することなく最後っ屁のように微かな煙を燻らせていた。その薄い煙の匂いが鼻をくすぐりわけもなく落ち着かない気分にしたが、その”煙”がある曲芸を連想させた。

立夫は、以前後輩が動画共有サイトに投稿されたある曲芸動画を携帯電話で見せてくれたことを思い出した。その動画では、外国人が煙草の煙を輪っか状にして無数に吐き出していた。

煙草の煙でできた輪っかは、時間が経つにつれて輪が拡がり消えていった。

「拡げることならできるかも・・・」

輪っかを排除するのではなく、拡げたり伸ばしたりすれば良いのではないかと気が付いた。

そこで、鉄の輪を触りながら、動画で見た煙草の曲芸のように大きく輪が広がっていくイメージを思い浮かべ、そうなるように強く念じた。

拡がれ！薄く、薄く煙のように拡がってしまえ！

強く念じた結果、鉄の輪が少し拡がった。要領さえわかってしまえば、素人の立夫でも、何とかできる。

「鉄の輪を拡げることができた」という成功体験が立夫のイメージを確固たる物とし、立夫の頭の片隅に残っていた「硬い物質の状態を容易に改変することはできない」というバイアスを排除すること

に成功したのだ。

これにより、立夫の肉体を拘束する鉄の輪を大きく広げること成功し、拘束から抜け出す準備は整った。ちなみに、フルガート王国の宮廷付きサイキールにより対サイキス結界が張られてはいたが、その結界は主に立夫の肉体に対してサイキスの行使を阻害する用途で用いられていた為、リーサの肉体に移った立夫に効果は無かったようだ。

では、なぜ立夫は精神体を肉体から離脱することができたのかといえば、理由は以下の二つである。

一つ目は、フルガート王国は小国であり、一流とはいえ他の大国の宮廷付きと比較すると月とスッポンのレベルにあり、太陽の子タツツォーの精神体と自身の肉体の相性が良く（つまり近い素質を持っている）、精神体を操ることのできるほどのサイクを内包する立夫の敵ではなかったこと。

二つ目は、それほど立夫のイメージが強烈であったということだ。キスぐらいでそこまで絶頂してしまった立夫のウブさの勝利である。それでも立夫が全ての拘束を解くには1時間以上掛かってしまったのだから、決して宮廷付きサイキールがボンクラというわけではないことを付け足しておく。

しかし、そこで更なる疑問が浮かび上がる。

タツツォーが立夫ではなく本物であった場合、立夫よりも容易に拘束を解くことが可能であったのではないか？

答えは否だ。その為に、タツツォーの精神を興奮状態に置き、正常な思考を阻害する為に調査されたお香がベッドの脇に置かれ、立夫の肉体の額にはサイキスの使用を阻害する魔方陣が描かれ、更に止めとばかりにタツツォーに拘束が解かれても今度は逃がさない為に、隣の部屋には宮廷付きサイキールと近衛部隊の精鋭が詰めて監視していたのだ。

今や香炉は破壊されて部屋に充滿していた煙は徐々に薄くなっている。額の魔方陣は、立夫がリーサの肉体で噴出した鼻血を浴び、その後偶然シートで拭い去られてしまった。魔術師や近衛兵が突入してこないのは、立夫がリーサの肉体を乗っ取ったことに気づいて下手に手を出せないからだろうか・・・？

とはいえ、そんな裏事情など一片も気づいていない立夫は、額の汗を拭って安堵していた。

とにかく、ようやく拘束を解くことができれば、次はリーサの肉体を抜け出して自身の肉体に戻らなければならない。

もう一度昇天のイメージを強く持つ為にキスをすることも考えたが、現在はリーサの肉体に取り付いている為、それは無理だ・・・無理であってほしいので却下する。

それに、立夫にはタツツオーのイタズラ心のおかげで、肉体に入り込んだり抜け出たりする時の感覚を覚えている為、なんとかかなりそうだ。

「じゃあ、この肉体をズルリと脱ぎ捨てるイメージで・・・抜けた！やったね！」

ズルリという擬音の通りに何かが擦れながら脱げ落ちていく感覚を味わい、ゾクゾクする快感とも不快感とも言えない不思議な感触が全身に走り、立夫は見事に憑依していたリーサの肉体から脱出することに成功した。

今度は、自分の（新しい）肉体に戻る為、椅子に座るようなイメージで肉体に重なる。

「ふう・・・戻れたか。憑依したり離脱したり、幽霊みたいだな。あっ・・・」

意外にあっさりと成功してしまい、改めてサイキスという不思議な力に呆れていた立夫の目の前で、リーサが崩れ落ち、拡げられた鉄の輪っかにゴイン！と頭をぶつけてベッドに転がった。

しかし、リーサは目覚めることなく目を半ば開いた状態で横たわっていた。それを見た立夫は胸を撫で下ろしかけたところで安心する場面ではないと気づき、誰も見ていないのに胸の前に持つていった手で眼前の鉄の輪っかを意味も無く撫でていた。

それからキツカリ2秒後に、自分の頬を引っぱたいて恥ずかしそうな表情で拘束からモゾモゾと抜け出した。

「鉄板の上で寝かされてたから背中痛いなあ。部屋の中臭くない？換気しなくっちゃね！」

父より学んだ処世術が一つ”問題の先送り”をする為に、目を覚まさないリーサをなるべく空気のように扱い、余計なことをしながらダラダラと時間を潰す。

窓を開けたら鉄格子が嵌っており、その隙間から夜の冷気が吹き込んでくる。

外の風景を観察したところ、立夫がいるのはどこかの街の中心にそびえる大きな建物の一室らしいことがわかったが、王城かどうかはわからない。眼下にはゆるやかな丘のような地形にできた街のようであり、それなりの大きさの街が広がっているが、街にある建物の殆どは平屋と二階建てであるため、丘の上にあるこの建物からは街の外れまでを見ることができた。街の中は電灯のような明かりが各所に設置されており、暗闇というわけではないので、それらを観察することができた。

何となく頭がスッキリしたような気になりー実際は思考力を低下させる作用の香炉の煙が換気されたー部屋の中之を改めて観察して

いた時に、あることに気が付いた。

静かすぎやじゃない？というか、なんで誰も来ないんだろう？

立夫にとっては都合の良いことであるが、一度同じことをしてタツツォーに逃げられてしまったのだから、監視が付いていてもおかしくは無いはずだ。

なにせ、自国の将来が懸かっているのだから。

先程、リーサに憑依していた時にビンやら香炉やらを落とし割って結構な音が響いていたが、特になにもリアクションが無いのはおかしい。

国家元首の娘たる王姫にボディガードの一つもつけずに、強大な力を持ち太陽の子と呼ばれるタツツォーと二人きりにするなんてあり得ない。

そんなことをうんうんと唸りながら考え込んでいたら小一時間ほど過ぎていた。

未だに目覚めないリーサ。

とにかくリーサのことを意識しないように別のことを考えたり部屋の掃除をしたりしていた立夫は、ついに限界を迎えていた。

呼吸はしているようだが、大きな声で呼びかけても体を揺すっても目を覚まさないリーサに、立夫は恐ろしい想像ばかりが浮かんできてしまう。

「このまま植物人間になったりしないよね？ねえ、そろそろ起きて頂けないでしょうか？」

返事は無い。ただの植物人間のような。

「いやいやいや！それじゃダメだから！後味悪すぎ！」

一体リーサはどうなってしまったのか。外から見ても全く状況がわからない為、手の打ちようが無い。

これまでに目を覚ますように念じてみたりもしたが、全く効果が無かった。

ベッドに横たわり、眼福・・・目の毒なのでシーツをかけてあげたリーサの手を握り、とにかくリーサに何が起きたのか？何をしてみったのかを強く知りたいと思い、その顔をじっと眺めていた。

すると、手を介して何かがチヨロチヨロと流れ込んでくるような感覚を覚えた。

「タツツオーに記憶を流し込まれて時と似ている・・・。」

はっとした立夫は継るように流れ込んでくる”何か”を理解しようと目を閉じて集中し始めた。

『お前は将来、この国の発展の為に 国の王室に嫁ぐのだ』

『リーサ姫、王家の一員たるものがこれぐらいのことでもできずにどうなさるのですか？』

『最近、【教団】が【太陽の子】を見出したとの報せが入りました。』

『リーサよ、私が王位を継ぐまでの我慢だ……。きっと解放してみせる！』

「リーサなぞ、政の道具に過ぎぬではありませんか、兄上！」

「ライル王子が！ライル様が盗賊団に襲撃され……」

「聡明なライル様が亡くなられ、残ったのは放蕩者の弟シャギル様か……この国は……。」

『【太陽の子】がザールーの全軍をたった一人で撃退したとの報告が入りました！ザールーは以降沈黙しています！』

『戦乱を機に周辺各国を征服していた国が【太陽の子】によって滅ぼされたようです!』

『【太陽の子】が 国とザーズルーとの繋がりを暴き、王室が解体されました!』

『わが国の未来はどうなってしまうのだ！
国の後ろ盾が無ければわが国など・・・』

「父上、リーサは【太陽の子】に心酔しているようです。ならば・・」

「リーサよ、なぜ逆らうのだ？ 貴様の願いと国益が一致した素晴らしい策ではないか。」

「この者は人の精神を操るサイキスを駆使するサイキールだそうだ・

「リーサさんは僕のものだあああああああ！……！！！」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

立夫は最後に流れ込んできた魂の叫びに暫し啞然とし、徐々に湧き上がってきた羞恥心のあまり思考が停止してしまった。

「しゃんつて・・・なんだよ。」

しかし、読み取ったリーサの記憶と思しき情報から、大体の事情を掴むことはできた。

王姫リーサは【太陽の子】への思いを利用され、王室により操られていたのだ。

事情を理解できたのはいいが、結局解決策は思いついていない。ただ、リーサをなんとか助けてやりたいという思いは強くなっていた。

「リーサしゃ・・・さんもなかなか不遇の人生を送っていたんだな。」

自分には想像も付かない王室という環境で様々なしがらみに縛り付けられて生活してきたリーサの苦悩は、正直計り知れない。だが、事情を知ってしまった為に、同情することを禁じえない。

まあ、【太陽の子】を謀略に嵌めたんだから、それぐらいは許して

もらえるよね？

タツツォーのように軍隊や国を滅ぼすような力はないかもしれないが、なんとか目の前にいる女の子を助けてあげたいと、立夫は決意した。

影の世直し集団参上！

立夫がリーサを救う決意を立てた時から遡ること数時間。フルガート王国の首都ガニモデーを囲う外壁の外側にいくつかの人影があった。

10人にも満たない人数の集団は、一様に頭のとっぺんからつま先まで真っ黒な装束に覆われ、夜陰に紛れている。そして、外壁の際に集まってコソコソと何かしている。実に怪しい光景だ。

しかし夜の静まったこの時間に、わざわざ街の外に出ている人など誰もおらず、見回りの警備兵も先ほどこの場所を通り過ぎたばかりなので、暫くは来ないだろう。

謎の集団の中で3人の何者かがボソボソと小さな声で会話している。

「お父様、準備が整いましたわ。いつでも行けます。」

「団長！こつちもオツケーですぜ！」

「こらっ、二人とも今はボスと呼びなさいと何度言えばわかるんだ！」

「ごめんなさい、おと・・ボス！」

「ボス、細かいですぜ。」

「よろしい！それでは影の世直し集団【空駆ける旅団】は、これより【太陽の子】救出作戦を開始する。レディー！」

「「「ゴー！」」」

10人にも満たない小集団が一斉に右手を天に掲げ小声で号令に応え、行動を開始した。

いとも簡単に20メートルはある外壁を飛び越え、一人一人がバラバラに街へと散っていった。

にしても、変なこだわりを持ったリーダーとノリノリな集団は一体何者なのか！？

その謎はまだ、夜の帳の中に隠されている。

決別と邂逅

立夫はリーサに抱きついていていた。

リーサに抱きついて自らの額をリーサの額に当てて目を瞑っている。どうやら、襲い掛かったわけではないようだ。

立夫は、リーサを助けると決意してから再びリーサの手を握り色々と試していたが、リーサの精神体の行方を探ることができずにいた。精神体と肉体を結びつけるヒモが頭から生えていたことから考えて、頭からヒモが伸びていないかも目を皿のようにして確認したが、光るヒモが伸びているようなことは無かった。

そうなれば、肉体の中にリーサの精神体があると考えられない為、今度は精神体と肉体を繋げる媒介である脳を調べてみようと考え至り、現在のような体勢になっていたのだった。

自分の視線がリーサの脳内を覗いているイメージを持ち、強く念じながらリーサの精神体の在り処を探っていた。

リーサは記憶に抱かれ眠っていた。

自分を慈しんでくれたが、今は亡き長兄ライルとの記憶。

自分を道具にしか見ていない父親ダヌートや次兄シャギルの記憶。

自分に教養を身につけさせたくれたが、冷徹だった家庭教師たちの記憶。

自分を婚約という名の戒めから解き放ってくれた憧れの【太陽の子】
シーマ・タッツォーの記録。

真っ暗な空間に映写機で映し出されたように様々な場面が映されては消えていく。

しかし、リーサの虚ろな瞳に光は届かず、閉じられた心には誰の声も届かない。

そのようにされたのだ。

リーサは今、特殊なサイキスをその身に受け、催眠状態に陥っていた。

その目的は、【太陽の子】シーマ・タッツォーとの子を生むこと。

この呪いは憧れの勇者シーマ・タッツォーを籠絡し、既成事実を作らなければ解かれることは無い。

フルガート王家では、有能な王位継承者であったライルが死に、友好関係のあった大国が実質崩壊してしまったことで、経済基盤の独自性故に周辺各国からの侵略の危機に瀕していた。

当初は、自分が大国の王室へ嫁ぐことで自治権を認められた属国として、周辺各国を牽制するはずであった。

リーサはその為だけに育てられた道具といっても過言ではない。

しかし、1年前のある日、大国とザール大連合との繋がりを暴いたシーマ・タツォーにより大国の王室は解体され、リーサの道具としての存在意義が消滅した。

それから1年が経過し、大国の後ろ盾を失ったフルガート王国は周辺の複数国家から侵略の兆候を読み取り、焦っていた。ザール大連合との戦乱によって、世界中の国々は多かれ少なかれ疲弊しており、特殊な経済基盤を持ったフルガート王国は他国にとって非常に旨みのある果実に見えたのだ。

そこで、放蕩息子の変名を持つシャギル王子がイナーズ最大の武力の象徴であるシーマ・タツォーの籠絡という愚策を実行するべく、どこからか連れてきた胡散臭いサイキールを使ってリーサを手駒へと変貌させたのだ。

だからリーサは目覚めない。目覚めることができない。

そんな意欲すら抑えられ、シャギルの命令を遂げるまでひたすらロボットのよう動き続ける。

そして、ここにはシーマ・タツォーはいない。だから何もしない。何もできない。

何がきっかけなのかはわからないが、リーサが愛し求め貪ろうとしていたシーマ・タツォーは目の前からいなくなり、寝室にいた筈が、どこにいるのかわからない。

催眠サイキスにより制限された”ルール”の中に、このような場所における対処の方法は無かった。

立夫のとてつもない欲望のたぎりがリーサの精神体を閉鎖的な状態に陥らせてしまったのだ。

だからリーサの精神体に意識が無く、肉体に宿っているにもかかわらず、植物状態になっていたのだ。

そんな状態がどれほど続いただろうか。

映画のように映されては消えていく記憶や記録の狭間に光が生まれた。

始めのうちは小さい蠟燭の炎のような頼りなげな光であったが、次第にその光は大きくなり、徐々に人型を形作っていった。

その光は、リーサに語りかけた。

「よかった。成仏してなくて。もうだめかと思ったよ。」

何者なのかはわからない。だけどシーマ・タッツォーではない。

その何者かはタッツォーの新しい宿主である立夫であった。

立夫はリーサ（肉体）の額に自分の額を当て、四苦八苦した後、「リーサの居場所に潜り込む」イメージで見事に自閉状態のリーサの精神体への干渉に成功した。

正確には精神体の意識の下層のさらに深層にある無意識にまで干渉することで、やっとリーサの精神体とコンタクトできたのだ。

催眠状態に陥っているリーサの精神体は、相手をタッツォーでないと判断すると、催眠のルールに従い半透明の壁で自身を囲み閉じこもった。

立夫に干渉されないために心の壁を作り、そのイメージが具現化し

ただ。

といっても、リーサのサイキスが行使されたのではなく、ただ単にリーサの精神体がそう見えるようになっただけの話である。精神体は、本人のイメージによって柔軟に姿形を変えるのだ。（たとえば、怒っている人の精神体は激しく炎が燃え上がっているように見えたりする）

だから、精神体をコントロールできる立夫はあっさりと壁をすり抜けリーサに触れようとする。

「いやあ、申し訳ないことをしました。こんなこと言ってなんですけど、そろそろ起きていただけないでしょうか？」

立夫は、片手で頭をかきながら、もう片方の手で無表情に虚空を見上げるリーサの肩に触れ、何やら違和感を覚えた。

「鎖まみれ？そういう趣味・・・ではないですよね。勿論、僕の趣味でもないですよ！」

なぜか、リーサに触れた瞬間、リーサの精神体の全身を束縛するように鎖が巻きついていくことに気づいたのだ。触れるまでは見えなかったのだから不思議なものである。

立夫は、自分がリーサの肉体を乗っ取った時の支配欲求がリーサの精神体を鎖で縛り付けたのだと考え、自分に隠れたサディスト性質があるのかも知れないと思い、必死でその考えを打ち消そうと頭を振った。

だが、そう考えるとリーサが自分を無視しているのも合点がいく。リーサはノーマルの人で鎖で縛り付けるような立夫にドン引きしているのだと。

一刻も早く鎖を解いてリーサを開放し、自分にはSMの趣味など無

いことを弁解しなければならぬ。

「僕にはこんな趣味ないですよ。ノーマルだから、対等に関係を築かなくちゃね。」

立夫は、いつか（半日前）タツツオーの精神体にグアバットをお見舞いした時と同じように、他人の精神体に強く干渉するイメージを思い浮かべながら鎖を握ってみた。

まだ、タツツオーのように触れずとも他人の精神体に干渉することはできないようだ。

すると、複雑に絡まっていたはずの催眠サイキスの鎖は、いとも簡単にリーサの体からスルスルとほどけて消えていった。

自分の支配欲求がこのような鎖を生んだのだと立夫は考えているが、それは半分正解である。全身に絡み付いている鎖は殆どがリーサの精神体に干渉している催眠サイキスの力を具現化したものであった。ただ、首輪のような鎖一本だけは立夫がリーサにもたらしただけであった。

強烈な支配欲求と共にリーサを乗っ取ったときにリーサを隷属させる為のサイキスが発動していたのだ。

催眠サイキスも他人を隷属させるサイキスに変わりないが、立夫のそれはロボットのようには「ルール」で行動を制限するようなものではなく、心の底から自分に隷属させるものであった。人格改変と言ってもいい。

つまり、催眠よりも上位の概念でリーサを支配した立夫だからリーサを縛り付けていた催眠サイキスをいとも容易く打ち破ることができたのだ。

改めて、立夫の欲深さが恐ろしくなる。だが、しばらく同じことは

できないだろう。ファーストキスは一度きりなのだから。

そして、首に絡まっていた最後の鎖の一本が消え去ると、リーサの目に徐々に光が宿ってきた。

それから暫く経ち、ようやく意識を取り戻したリーサは目の前の立夫を見る。

が、何もできない。

束縛から解放されてはいても、リーサは精神体をコントロールする術を持たないからだ。

そんな様子を察してか、立夫はリーサの両肩を優しく抱き、おっかなびっくり話しかける。

「あ、あの・・・僕には女性を縛って快楽を得るような趣味はありませんからね。今回のことは僕自身にもコントロールできなかった云わば事故なんです。このような事態が起きてしまい、非常に残念であると共に今回の反省点を踏まえ、今後は未然にトラブルの発生を予防できるよう対処していきたいと思います。」

父より学んだ処世術が一つ”うやむやな謝罪”を駆使し、今回のことを煙に巻こうと必死の立夫と、自分をサイキスの戒めより解き放ってくれたと思われる目の前の人へ感謝の眼差しを向けるリーサは意思疎通の平行線を辿る。

「ま、まあ、とりあえず目を覚ましたなら大丈夫ですよ？もう植人物人間じゃないですよ？先に起きて待ってます。ちゃんと起きてくださいね!？」

そう言つて、立夫は出現した時の光景を巻き戻すようにリーサの目の前から姿を消した。

残されたリーサは、自身が開放されたことを理解したが、”起きる”という言葉の意味がわからず困惑していた。

その為、リーサへの精神体への干渉を止め、ベッドの傍らで彼女の起床を待つ立夫は、いつまで経っても起きてくれないことへ焦りまくっていた。

「あれでもダメなの！？なんかうまく言った気がしたのに！！もう！起きて！起きてくれー！」

焦りが混乱を呼び目を回し始めた立夫は、2年前に保健体育の授業で習った心臓マッサージと人工呼吸の方法を突如思い出した。思い出してしまった、藁をも縋る思いで飛びつくのが人間というものだ。

そして、授業で習った手順どおりに動き始めた。

まずは、肩を叩き声を掛ける事で意識の確認だ。

「もしもし！大丈夫ですか！？・・・意識なし！」

意識が無いことを確認したら、周囲に協力を求めなければ。

「誰か来てください！救急車を呼んでいただけませんか！？」

立夫とリーサ以外に誰もいない部屋でも求められた要請は空しく響くだけであつた。そもそもこの世界には救急車は存在していない。

応援を要請したら枕でリーサの気道を確保し、呼吸の有無を確認する。

美しい顔に耳を近づけると、甘美な吐息が耳をくすぐる。そこで、立夫の中の何かが弾けた。いや、ハジケた

「呼吸あり！これより人工呼吸を始めます！」

授業で習った内容を逸脱し、人工呼吸という口実の元にブツチュとキスをする立夫。

改めて説明すると、先ほどから立夫は混乱している。混乱しているのだ。

「未だ意識ナシ！心臓マッサージを始めろ！」

極めて精密な指の動きがリーサのおっ……胸部を繊細に圧迫する。

キツカリ30回揉……圧迫し、再びブツチュとキスをする。

何度目かの心臓マッサージを終えても一向に目を覚まさないリーサに、立夫の混乱は頂点に達した。

室内には言葉にならない言葉を叫んでリーサの眠るベッドの周囲を踊り跳ねる立夫がいた。

「こいつぁー大変だ！右目が！右目があゝ！祭りだワッショイ！N Kは見えてません！」

混乱の境地である。

上半身裸になり、ベッドの周りを一心不乱に踊り回る立夫。

その足運びは段々と洗練され、まるで洩れることの無い大河を髣髴とさせる、優雅にして決して止まることの無い円舞を舞い始める。

もはやそこに言葉は無く、一つの芸術が完成されつつあった。

露になった上半身の筋肉は、彼が作り出す一足一足の流れに合わせ
て躍動し、様々な表情を見せている。優雅な動きの中に時折見せる
疾風迅雷のごとき鋭いステップは彼の肉体に浮かんだ玉の汗を跳ね
飛ばし、光に反射したそれら一粒一粒が宝石のように輝く。

彼の表情は何かを悟ったように安らぎ、その目線すら芸術の一部な
のではないかと思わせる。

僕は表現者。ただ舞い踊り、この空間という名のキャンパスに僕の
肉体という名の絵筆を用いて描いていく。これが僕の情熱の発露で
あり、芸術なんだ！

阿呆である。阿呆であるが、その舞いは洗練を極め、一切無駄の無
い無駄な動きを繰り返し返す彼はまさしく表現者であるといえるだろう。
無駄こそが芸術なのだから。

この時間が、この空間が永遠に続いて欲しい。この心地の良い肉体
を永遠に動かし続けたい……。

しかし、その願いが叶うことはない。否、その願いは叶えない。永
遠に続くものなどない。

儚いからこそ美しく、儚いからこそ永遠を願うことができるのだ。
ある意味トランス状態にまでなった立夫の舞いはクライマックスへ
と近づく。

リーサの眠るベッドへと近づくにつれ、動きが激しくなっていく。
大量の汗が舞い飛び、空間を宝石の輝きで彩る。

最後の時は唐突に訪れる。

立夫はリーサの眠るベッドへと回転しながら飛び上がる。

立夫は自分の周囲のグルグルと回る景色を見逃さぬよう眺め続ける。まるで、スローモーションのようにゆっくりと巡る景色を眺めながら、足元に迫るリーサの肢体意識する。

これでフィニッシュだ……。この芸術はリーサというピースを嵌めることで完成する。。。

ベッドへと着地した立夫は両足の間にリーサを挟むように仁王立ちし、リーサの寝顔を見下ろす。

立夫の表情は達成感に満たされ、喜びが溢れ出してきている。

振り上げた左腕を風より早く振り下ろす。

次の瞬間。

バチーーーーーン!!!!!!

乾いた音が部屋に響く。

立夫は、リーサの頬を左手で引つ叩いていた。音から察するにビンタだ。

「ヒッ！」

美しい寝顔を晒していたリーサが体をビクンと大きく跳ね上がらせ、大きく目を開いた。

リーサの覚醒。

それこそが、立夫の作り出した芸術の最後の1ピースであったのだ。うっむ、深い。

「あ、あなたは・・・まさか、シーマ・タッチョ・・・タッチョー様ですか？」

開口一番に目の前に仁王立ちする男を何者か見破る彼女はきつと寝起きが良いのだろう。

名前を噛む当たりに熟練のオツチョコチョイを感じることができる。

「違う！僕は表現者立夫だあ！」

誰も止める人間がないというのは残酷なことである。

リーサは意識を取り戻したばかりだが、操られていたときの記憶はしっかりと残っているらしく、とりあえず立夫の言うことは無視して謝罪を始めた。

「今回のことは、私の意志ではありませんでしたが、それでもシーマ様に多大なるご迷惑をお掛けしてしまったこと、大変申し訳なく思っております。どんなことをしてでも・・・たとえこの命を掛けてでも罪の償いを・・・。」

大胆なことをした記憶が脳裏を過ぎったのか、顔を真っ赤にしながら立夫に謝るリーサの姿を見れば、大抵のことは許したくなってしまうだろう。

だが、辰夫は違った。彼の混乱は治まっていない。

「僕は立夫だよ！タ・ツ・オ！それではリーサ、僕と共に究極の芸術を完成させようではないか！さあ、共に歩もう！僕らの芸術坂は今始まったのだ！世界よ、神々よ、我が人生を刮目せよ！」

まるで最終回のようなことを口走る立夫に、目を白黒させたリーサ

は、立夫の言葉を必死に理解しようとして気づく。

共に歩む・・・？

僕らの・・・人生？

人生を・・・共に歩む？

・・・結婚？・・・プロポーズ！？

とんでもない勘違いをしてしまったリーサだが、憧れであり、望まぬ形とはいえファーストキスを捧げたのタッツォーのプロポーズを断るわけがない。

「はい！喜んであなたの人生の傍らを歩ませて頂きます！タッツォー様！」

「うむ。それではいざ行かん！新たなる旅立ちを！ちなみに僕は立夫だぞ！」

「はい？タッツォ様とお呼びすればよいのでしょうか？」

「・・・まあ、それでよい。あと”様”など要らぬ！これより僕らは芸術を完成させる為のパートナーなのだから！」

パートナー・・・パートナー・・・パートナー・・・。

特定の単語のみが切り出され、拡大解釈される立夫の言葉は、リーサの心にトドメを刺した。いや、既にトドメは刺さりっぱなしであった。

「はい！タッツォさ・・・タッツォー！」

体を起こしたリーサは仁王立ちする立夫の脚にハッシと抱きつき、二人して虚空を眩しげに見つめる。

「さあ、いこ」スコーーーン！

芸術の道を究めんとリーサと共に始めの一步を踏み出そうとした瞬間、どこからともなく飛来した氷の塊を後頭部に受け、立夫はベツドから落ち気を失った。

「いやあああああ！タツツオオオオオオオ！」

悲鳴を上げ、倒れた立夫に縋りつこうとするリーサは真後ろに突如現れた黒ずくめの何者かによって首筋に手刀を入れられ、立夫に折り重なるように気を失った。

黒ずくめの何者かが部屋の中に次々と現れる。
その中の一人がポツリと呟く。

「こんな・・・こんなことであっていいの？浚われたと思ってたら浮気してたなんて・・・いつそタツツオーを殺して私も・・・」

声色から察するに女性のようだ。黒ずくめの衣装は体型の判別を阻害する為に、頭からスッポリと被るローブのようになっており、更に視覚障害のサイキスが掛けられている為、闇夜であれば一般人は鼻先を通り過ぎても気づくことができないようにできている。

女性の洒落にならない呟きを耳にした他の黒ずくめの何者かが慌ててタツツオーと女性の間に割って入り宥める。

「お前も見えていてわかっただろう！彼は芸術だの何だの叫んで酷く混乱していたじゃないか！」

こちらは男性のようだ。ダンディーな低音が部屋に響く。

「だからって、だからって……将来を真剣に誓い合った私というものが在りながら……私は……うえ……ん」

女性が泣き出して座り込んでしまった。

女性を宥めた男性や、様子を見守っていた他の黒ずくめの面々が慌て出す。中には、笑いを必死でこらえている者もいるようだ。

「とにかく、目的は果たした。もうすぐ救国機関の者達も到着するだろう。そろそろテントに帰るとしよう。おい！3番！笑ってないでタツツオーを運びなさい！こちらの女性は……リーサと言ったか。6番が運びなさい。」

男性から指示が飛び、番号に該当する人間がそれぞれ動く。

「それでは、【空駆ける旅団】これにて任務完了！帰るぞ！」

次の瞬間まるで手品のように部屋の中から誰もいなくなった。

夜明けにはまだ早い、後数時間もすればフルガートの国民は驚愕することになるだろう。

その日の朝、実際に顎が外れるほど驚愕した国民の何人かが閉じななくなった顎を押さえて医者に駆け込んだらしい。

その後、イナーズの世界各国に向けて【太陽の子教団】よりとある情報が発表された。

温泉大国フルガート王国の王室が、【太陽の子】拉致・監禁の罪で一夜にして王室解体の刑を処したとのことだ。

その発表を受けて、フルガート王国侵略を計画していた周辺の数国は肩を落とした。

ダンス トゥー ザ リップ（後書き）

立夫は、ベッドで目覚めた。

辺りを見回すと、また何者かに連れ去られたことがわかった。そして、案の定、首や手足は縛り付けられている。

そういえば、リーサは目覚めたのだろうか？

リーサの精神体を解放したあたりからの記憶が全くない。

「おい、リーサさん。いるかい？」

あれ？

なんで、部屋のドアの色がさっきより白くなってるの？

ちよつ、部屋の中が急に寒くなってきたくない？

ていうか、凍ってるよ！どういうこと？

アッーーーーー！！

立夫はどこへ連れてこられたのか？

黒ずくめの集団は一体何者なのか？

国を潰しちゃう【太陽の教団】とは？

次回『ジェラシー ナイト クーラー』

【番外編】フルガート王国興亡記〜ボーン

トウー

ビー

マリオネツ

事件の起きた背景の解説回

ビバノンノン

リーサは家族とは隔離され育てられた。

父であるダヌート・ドル・フルガート王は、リーサを避けていた。彼女の誕生と引き換えに命を散らした妻アレサ・ドル・フルガートの面影を残すリーサを見ると、どうしても深愛したアレサのことを思い出してしまう為に。ダヌートはあまり王者の素質を持たない弱い人間であつた。その為、アレサの死を境に無気力へと陥り、あまり政治に口を出すことも無く傍観をするようになった。そして、大国の王室からリーサに縁談が舞い込むや否や二つ返事で快諾し、それを口実に花嫁修業と称してリーサを離宮へと隔離して、徹底的に教育を施させた。

それは、花嫁修業とは名ばかりの逸脱した教育であつたが、とにかく一秒でもリーサが城に戻らぬように、間断なく様々な知識・技術をその身に叩き込まれることとなつたのだ。

その様子を知つてか知らずか、母の愛を受けて育つた第一王子ライルは父や母の分までリーサを愛すべく、暇を見つけては離宮へ訪れリーサを慈しんでいた。

しかし、物心が付いたばかりの頃に母を失い、王室のプレッシャーのみを一身に受けて育つてしまった第二王子シャギルは、母の命と引き換えに誕生したリーサを逆恨みし、わざわざ離宮に赴いてはリーサに嫌がらせをする始末であつた。

王室としてはありきたりな冷え切つた家庭ではあつたが、父には避けられ次兄には憎まれ唯一の心の支えは長兄のライルのみであつた。ライルは聡明な王位継承者であつた。幼少時より剣術、サイキス、馬術、戦略・戦術論、経済、政治等の帝王学を学び、16歳で学問を修めると、国中を巡つて自国の産業の成長要因と阻害要因を分析

し、政治主導で産業を発展させることに成功させた。

ちなみにフルガート王国最大の産業は温泉を利用した観光産業と医療産業である。フルガートの狭い領地にポツリと存在するポルペ火山の麓の樹海の中に、秘湯として存在していた温泉脈からパイプラインを引き、火山の麓近くに造成された平地に温泉街を築いて交通インフラを整えたことで、観光や医療目的の客を国外から招くことに成功。それまでは物好きな冒険者のみが利用していた温泉を誰もが楽しめる一大温泉レジャーへと変貌させたフルガートは温泉大国の名を欲しいままにした。

これにより国内雇用的大幅な創出に成功し、税収が急増したことを機に社会保障を整備して、国民の支持を獲得したライルは真なる王として、近い未来の即位を誰もが信じて疑わなかった。

また、ライルは小国故に大国から侵略を受ける可能性を考慮し、防衛力の強化と諜報組織の整備にも心血を注ぎ、国体を磐石なものとする方策を次々と打ち出していった。

しかし、そんな栄光もわずか数年で終わりの兆しを見せ始める。

ライルが22歳（リーサは15歳）となり、時期国王として周辺各国への外交を始めた頃にそれは起きた。

ライルはリーサと婚約をしていた王室のある大国へと赴き、ある約束を守る為に交渉を行い、その帰路で非常に錬度の高い盗賊団に襲撃されて殺されたらしい。

これから経済大国へとの上がっていくだろう国の強力な指導者候補として名を馳せていたライル王子の悲報はフルガート王国の国民を失意の底へと落とし、周辺国では様々な憶測が飛び交った。

何よりも盗賊団による王子の誘拐ではなく殺害であったことが疑惑を呼び、ライル王子は謀殺されたとまことしやかに噂された。

そして、その首謀者はライル王子が殺される少し前まで何かの交渉をしていた大国の王室であると誰もが考えていた。何故ならばライ

ル王子一行は精鋭が護衛していたが一人も残らず殲滅され、目撃者が一人もいなかったにも関わらず、盗賊団による犯行と断定して各国に発表していたからだ。

しかし、フルガートは小国であり外交上の不利があつた為に強く追求することができず、泣き寝入りをするしかなかった。

リーサにはわかったいた、兄ライルがどのような交渉をしに大国へ赴いていたのかを。

自分とその王室の跡継ぎとの間に結ばれていた婚約の解消である。

ライルは大国へ赴く前にリーサのいる離宮へ寄り、あることを話していた。

「大国と対等に渡り合える準備が整った。お前との約束を果たせるかもしれない」と。

内容については一切教えてくれなかったが、自信に満ちた目で語るライルを見て、リーサは希望が膨れ上がっていくのを感じていた。婚約という束縛から解放され、ある程度自由な恋愛を許してもらえるかもしれない。自分のやりたいことを追求できるかもしれない。そして、それから1週間も経たずに届いたライルの悲報に驚愕し、絶望した。

自分のせいでライルは殺されたのだと思っていた。どんな条件と引き換えにしたのかはわからないが、自分と大国の王位継承者との婚約破棄を求めたライルが大国の王の不興を買い、殺されたのだと。

第一王子のライルが死んだことで、第二王子のシャギルが第一王位継承者となったが、放蕩者で知られていたシャギルを知る国民は国の将来を悲観した。

それが気に食わなかったシャギルは、ライルの偉業を超えるべく、兄と同じように政治主導で新たな事業を立ち上げた。

それは飲料水事業であつた。ライルが見出した温泉の水は適度にミネラル分を含む「飲める温泉」であることが調査で判明していた為、シャギルが先導し健康に良い飲料水として他国への輸出を始めたのだ。

たいていの場合、健康に良い飲み水は世界各地にある不思議な力を持った泉の湧き水のことを指し、一口飲めば軽い病気が治ってしまうほどの効能があつた。

しかし、その水は湧き出ですぐに効力を失ってしまう為に直接飲みに行くしかなく、しかも、その泉の土地所有者たちが法外な値段で湧き水を飲用する権利を売っていたりしたので、ごく一部の人間しか口にすることができなかった。

それに対して、ガラス瓶に詰められて手ごろな価格で売り出されたフルガート産の健康水は入手が比較的容易であり、さらにノドゴシが新しい炭酸水であつた為、効果はあまりないが爆発的に普及することになる。

その飲料水事業は、実はライルが計画していたものをシャギルが引き継いだものであり、そのロードマップに沿っていた最初のうちは事業は好況であつた。

しかし、ライルの業績を超えようと焦るシャギルはしてはならない愚行を犯してしまうのだ。

それまで絶好調であつた温泉事業をないがしろにし始めたのである。

既にライル王子の手によって温泉街の経営権は民間へと委譲されおり、経営者達は温泉利用税を納めることで温泉レジャーや温泉宿を経営する権利を得ていた。

しかし、シャギルの横暴により不当に吊り上げられた税金を支払うか、経営権を国に返すかの選択肢を迫られ、仕方なく経営権を返還し、運営責任者として街に残ることになった。

それでシャギルが何をしたのかといえば、温泉の水を飲料水事業に多く回すことだった。飲料水事業の業績が供給限界を超えて好調となった為に、温泉事業に利用していた分を飲料水事業に回したのだ。結果引き起こされる温泉事業の不具合に、シャギルは詐欺的な手法で対処した。

それまではかけ捨てであつた温泉のお湯を浄水施設へと集め、再加熱して利用したのだ。

それも始めのうちだけで、そのうち近くを流れる川から水を引いて利用するようになってしまった。

温泉街の運営責任者達は、それではただの銭湯と変わらないとシャギルに抗議したが、シャギルは偽薬にも医療的效果があると屁理屈をこね、良心的な運営責任者達を解雇していった。

それからの破綻は早かった。温泉街に湯治目的で訪れていた人々がいつまで経つても回復しないと訴え始めたのだ。その情報が口から口を渡り、温泉街の客は好調時に比較して5割ほどに減っていた。それでも客が温泉街に訪れていたのは、ライル王子が徹底的に根付かせた行き届いたサービスと演出された非日常的な風景のおかげであつた。

だが、運営者達はシャギルの横暴に遂に我慢の限界を超え、解雇された元運営責任者たちが現場で行われていた一部始終を周辺各国に告発したのだ。

フルガート温泉はシャギルによって偽物にすり替えられた。温泉の水はただの川の水だと。

その情報漏えいによる事業へのダメージは凄まじかった。火山の麓の温泉を利用していた冒険者以外の観光客はほぼなくなり、栄華を誇った温泉街は湯気すら立たない寂しい街へと変貌してしまったのだ。

そして、信用を傷つけられてしまった”フルガート”の名を関する

飲料水（こちらは本物）も売上げを4割にまで落としていった。まさに大打撃である。

シャギルは相次ぐ事業拡大の為に大国を中心とした周辺国家から莫大な額の借金をしており、その返済にも窮するようになってしまっていた。首が回らなくなったシャギルはダヌート王に泣きつき、それまで傍観していたダヌート王は仕方なしと判断し、リーサの婚約だけを頼りに大国に借金の返済猶予延長や利子の減免について何度も交渉を行った。

そんなある日、大国の王がフルガートを訪れダヌート王に借金の返済に関してある提案を突きつけたのだ。その内容は国家の併合である。

温泉事業や飲料水事業など、ユニークな事業の立ち上げを成功させ、信用さえ回復できれば経済発展の下地が完璧に整っているフルガートは大国を含む周辺各国にとって羨望の的だった。

ライル王子が亡くなったから1年が経過し、リーサの結婚の日も迫っていた。

その結婚にあわせて国の併合を発表しようと画策する大国の圧力に負け、ゴイル王は自身の代でのフルガート王家消滅に悲嘆した。

だが、物語はいつだって突然始まるのだ。

ザースルー大連合の大軍をたった一人で沈黙させ、ザースルーとの戦乱によって引き起こされたイナース界の国々の戦乱や混乱を収める為に世界中を巡っていた「太陽の子」シーマ・タッツォーが大国を訪れ、その不正

を暴露したのだ。大国はザースルー大連合の後援国の一つで、タッツォーによって撃退され、散り散りになったザースルー大連合の幹部と軍隊の一部を匿っていたことが判明したのだ。

大国の王はタツツォーに示された証拠に反論の隙を見つけ、それを理由に【太陽の子教団】での裁判を提案した。教団への出頭を理由に数日の猶予を取り付けた王は、タツツォーを城から引き取らせた。そして、1年前に似たようなことを言い出してきた輩と同じ末路を辿らせねばならないと判断した王は、1年前と同じようにザールーの幹部に秘密裏に連絡を取り、タツツォーの暗殺を命じた。

タツツォーは、翌日の朝に王との約束を破り城を訪れ、ザールー幹部の首を王に投げつけたのだった。つまり、王は泳がされ見事に尻尾を掴まれてしまったのだ。

これで言い逃れのできなくなった王は開き直り、サイキールの力で王城を離脱。念のため王都近郊に配置していた軍隊と合流してタツツォーを殺すべく指揮を揮ったが、結果は瞬殺。

10万の大軍勢をほんの一瞬で無力化。腰を抜かした大国の王を捕縛し既に手配していた【太陽の子教団】の救国暫定統治機関（タツツォーの尻拭い組織）を伴い王都へ戻り、王都内にある教団施設にて簡易審問を行い王を有罪として【ザールー支援国家解体法】を発動。王室を解体してしまった。

その後は救国暫定統治機関が国家運営を代行し、数年かけて共和制国家へと移行させていくことが発表された。

その当時、王都から脱出して他国へと亡命する貴族の馬車が長蛇の列を作ったとか。

これらの大事件の裏には、亡きライル・ドル・フルガート王子が関わっていたことが後に発表された。築き上げた諜報網より大国とザールー大連合の関係を知り得たライルは、自身が大国との交渉を失敗し命を落とした場合に限り、当該情報を【太陽の子教団】へと通報する手立てを整えていたのだ。

この件が世界中に発表されると、国民や周辺各国からのライルへの評価は更に上がり、正義の殉教者として祭り上げられた。

それまでリーサは王城から離れた離宮に隔離され、花嫁修業の名の下に朝から晩まで冷徹な家庭教師たちにより幅広すぎる教育が施されてきた。朝起きてから、夜眠りに付くまで自由な時間は皆無といっていいほど縛り付けられ将来を半ば諦めていたが、その時初めて世界が色を持ったような気がした。

もしかしたら、お父様とお話できるかもしれない。

もしかしたら私を憎んでいるというシャギルお兄様と仲直りできるかもしれない。

もしかしたら亡くなったお母様やライル兄様のお話を聞かせてもらえるかもしれない。

もしかしたら家族と楽しい生活を送ることができるかもしれない。

そのような希望を持ち、希望を生み出すきっかけを与えてくれたシーマ・タツツオーに感謝し、憧れていた。

それが苦難を招くとも知らずに。

父ダヌート王より時々王城へと参上する許しを無理やり得たリーサは、夢見た生活を叶えるために父や兄と積極的に交流を持つとした。日々の些細な出来事を報告したり、憧れのシーマ・タツツオーの話題を出してみたりとあの手この手で”家族団欒”というものを味わおうと努力した。

ゴイル王は決してリーサと目を合わせようとせず、話も殆ど聞いてくれなかった。シャギルは、憎しみのこもった目でリーサを睨み付け、一言も会話をせずに立ち去っていった。

リーサは、そんなことは最初のうちだけだと信じて信じ続けて二人

に接触し続けた。

しかし、遂にリーサの行動が報われることは無かった。

リーサが王城に居を移してからちょうど1年が過ぎた時、なんと兄のシャギルがリーサをお茶会に招待した。

リーサは遂に兄と和解できると喜び、呼び出された談話室へと向かった。二人きりで話をしたいとのことだったので、従者を付けずに一人きりで部屋を訪ねたのだった。

談話室の前にたどり着いたリーサは自分の身なりを整えると、一度深く深呼吸してドアをノックした。

「シャギルお兄様、リーサでございます。お招きに与り参上いたしました。」

心臓がドキドキと高鳴っているのがわかる。ようやく兄と、家族と共に家族らしいことができるかと期待に胸をときめかせて兄の返事を待った。

ドアがメイドにより開かれ、中へと招き入れられる。

「やあ、リーサ。よく来てくれたね。息災かな？今日は君と話をしたくて呼んでしまったんだが、迷惑じゃなかったかな？」

今まで見たことのない優しい微笑みを浮かべ、シャギルはリーサを部屋の中へと招き入れた。

シャギルの気遣いに感激し、目を潤ませながらリーサは答える。

「そのようなことはありません！お兄様にお声を掛けて頂き、とても嬉しく思っております！」

遂に兄の自分に対する憎しみを取り払うことができた。リーサは喜んで兄と色々なことを話していった。

1年前まで住居としていた離宮やそこでの生活のこと、王城に居を移してから発見したこと、自分とこの国の危機を救ってくれた【太陽の子】シーマ・タツツォーのことなど、自分の少ない身の上話に花を咲かせる。

シャギルも笑顔でリーサの話を聞き、何か聞かれることがあれば気さくに答えていく。

そこには、団欒を楽しむ家族の姿が生まれつつあった。過去の憎しみを清算し、慈しみに満ちた目で語り合う二人の姿は、ようやく本来の兄妹のあるべき形になろうとしていた。

楽しい会話が続き、笑い声が室内に響き渡る。

ここに父上もいらつしやるといいのに……。いえ、これから叶えればいい。

そんなことを頭の片隅で考えていると、シャギルがおもむろに自分の前に置かれたベルを鳴らす。

「さて、リーサ。これから私のちょっとした願いを叶えてくれないかな。」

談話室の扉がノックされ、シャギルがノックした者の入室を許可する。

入室してきた何者かを一瞥したリーサは、嫌な予感がした。その者は、黒いローブを被り、無表情でリーサを見ている。ただ見ているだけなのに、リーサは焦燥感に襲われる。

兄ライルの死を知らされた時のような心が抜け落ちていくような感覚。

この場に留まるだけで思考力を奪われ、意志を踏みにじられ、命を

弄ばれるイメージが脳裏に浮かぶ。

一刻も早くこの場を抜け出さなければならぬ。そう強く思うが、その意志は既に踏みにじられ体を指一本動かそうとすら思えない。既に手遅れであった。

”あの頃”と同じ顔。

いつの間にか席を立っていたシャギルは、リーサを憎み嫌がらせをしていた頃の蔑むような表情でリーサを見下ろしていた。

そして、これまでの穏やかな雰囲気を崩壊させるように嫌らしい声が部屋に響く。

「リーサ、この者は面白いサイキスを操るサイキールだな。貴様を私の忠実な僕に仕立て上げてくれるそうだ。ククッ。」

邪悪な笑みを浮かべたシャギルが入室した男に合図し、二人でリーサの元へ近寄ってくる。

一体何が起きようとしているのか。そんな疑問すらも掻き消されたリーサは光の消えた目で、しかし目の前の2人を見つめることしかできない。

「これから貴様を愛玩人形にしてやろう。思いを寄せるシーマ・タツオーのな。」

わざわざ耳元で囁くように話しかけたシャギルは、後ろにいた男と入れ替わるようにリーサから離れた。

男が右手を上げ、リーサの頭にポンと置く。

その時まで無表情であった男の表情が初めて感情を表した。

とても嬉しそうな微笑。好奇心を刺激されるおもちゃを見つけた子

どのような無垢な笑顔。

喜びの溢れる表情のまま、頭に置かれた手がリーサの目を覆い、内側で規則的なか不規則なのか、何度も閃光が迸る。サイキスは行使されたようだ。

リーサはかけらのように残った知覚で、自らの心（精神体）に操り人形のような糸が絡み付いてくる感覚を覚える。その糸を吊っているのは、目の前の男が作り出した「ルール」であり、リーサはルールに糸を引かれ動く文字通り傀儡となった。

ルールは単純なものであった。

ルール１・シャギル・ドル・フルガートの命令に忠実に従うこと

ルール２・ダヌート・ドル・フルガート及びシャギル・ドル・フルガートに決して自発的に接触せぬこと

しかし、ルールは単純であるほど、汎用性を発揮する。

「命令だ。リーサよ、これより渡す指示書に従い、シーマタッツォーとの子を成せ。」

その瞬間、リーサはシーマ・タッツォーをフルガート王国のものとするための道具になった。

リーサは、渡された指示書に従い自身の誘拐をでっち上げ、故ライルのおかげで築かれた【太陽の子教団】とのパイプを経由してシーマ・タッツォーを召喚することに成功した。

そして、事件は引き起こされた。

ジェラシー ナイト クーラー 1

さらわれて、責められて

（どうしてこうなったんだろう・・・。

いや。原因はさっきから何回もしつこく尋問されてるから大体わかってはいるけど、意味がわからない。

どうしてこうなったの？）

この世界

イナズ

に来てからトラブルに連続して巻き込まれてしまった立夫は、タツツォーという人間のトラブルを引き寄せる体質に呆然としていた。

（これは、タツツォーも嫌になるかも・・・。）

立夫は現在、壁や床など全てが いつの間にか 氷のオブジェで統一されたクールな部屋で、氷漬けにされた椅子に座らされて拘束されていた。否、拘束具などは一切身に着けてはいない。動くことができなかったのだ。

決して、氷にお尻が張り付いて動けなくなってしまったのではない。

目の前の、やはり氷漬けの机を挟んで反対側に、真っ黒なフード付きのローブを纏いフードを深く被って顔を隠した何者かが椅子には座らずに立ったままこちらを見下ろしている。

フードの陰からわずかに見える何者かの両目は、今にも溢れ出しそうな冷たい殺気を抑え込んでいることが、” そういった事” には無縁であった立夫にも窺い知ることができる。

立夫は黒ずくめの者の目線から放たれるプレッシャーに圧され、椅

子に縫い付けられたように動けなくなってしまうっていたのだ。

（指一本でも動かしたら、殺される・・・気がする。）

寒さと恐怖に震えながら吐き出される白い吐息は細く弱々しい。

現在、この凍った空間の全てを支配しているのは目の前の黒ずくめの女であり、その支配下に立夫の命も含まれている。

蛇に睨まれた蛙の心境に全身が凍えそうになりながら、しかし、その視線から目を逸らすこともできず、ただただ肝を冷やす。

先程から立夫に問われ続けている質問を目の前の人間は再び繰り返す。

声から判断するに女性のようであるが、そんなことは関係ない。

「シーマ・タツツオーよ、あなたはフルガートの王姫を手籠めにしたのですね。ボソボソ」

先程から目の前の人間はこの問いを繰り返している。最後の方に聞き取りにくい小さな声で何かを話しているらしいが、よくわからない。

（違う！僕は浚われて無理やり襲われたんだ！）

質問内容に釣り合わない気がするプレッシャーを跳ね除けて、再び繰り返された女の問いを否定したい立夫が声を上げようとするも、また失敗に終わる。

喉に何かが張り付いているように息苦しく、口は錠を掛けられたように重く閉ざされ唇が微かに痙攣するようにピクピク動くのみ。唸り声を上げることさえ叶わないのだ。

「沈黙するということは、認めるのですね。」

女の視線から遂に殺気があふれ出し、これまでも感じていた心臓を掴まれたような感覚がさらに強くなった。

否定したいのに、否定すらさせてもらえない。立夫はその理不尽に絶望し、一歩先にあるかもしれない”死”を幻視して呼吸が浅く不規則になっていく。

立夫の異常を認めた女は、今始めて自らの発する殺気に気づいたのか、立夫から目を逸らした。

どうやら感情を抑えることができなくなっていたようだ。

そして、漸く殺人的なプレッシャーから解放された立夫はゲホゲホと咽ながら声を出す為に呼吸を整える。

どうやら、一方的に審判を下すつもりはなく、立夫の言い分を聞く耳を持っていることがわかり、少し落ち着くが安堵することはできない。

未だにこの空間の支配者は目の前の女にあり、立夫は女によってかろうじて生かされていると思っている。

本当はそんなことはないのだが・・・。

とにかく、立夫は女の問いを否定する為に声を上げる。

「僕は・・・リーサしゃ・・・ヒッ!・・・王・・・姫を・・・手・・・籠め・・・にし・・・てない!」

リーサに『しゃん』と阿呆みみたいな敬称をつけそうになった瞬間、再び女と目が合い場のプレッシャーが増したせいで悲鳴を上げてしまったが、何とか言い直したことで、解放された。

女は俯いて立夫の返事について何か考えをめぐらせているようだ。若干口の端が吊り上がっているのが見え、立夫の恐怖が増す。

立夫は相手が何者かについて憶測する。

リーサ王姫と関係を持ったか否かに拘り、殺気を抑えられなくなつたということは、フルガート王室関係者なのかもしれないが、そもそも今回の件の首謀者はフルガート王室そのものである為、辻褄が合わない。

では、逆にタッツォーが女性と関係を持つことに対して殺意を抱く人間がいるのか考えるも、中途半端に渡されたタッツォーの記憶からは該当する人物が思い当たらなかった。

もしかしたら、【太陽の子教団】の関係者なのかもしれないと推測する。たとえば、教団に属する人間は異性と関係を持つてはならない戒律があるのかもしれない。

しかし、それならば助けしてくれることはあってもこのような状況に追い込むことなどありえないはずである。

そこで思い至るのが、”事情を知らない第三者”である。

今回の事件の表層だけを偶然知って勘違いでもない限り、間違っても立夫が攻められる立場にないことは一目瞭然なのだから。

そういった第三者の中で、立夫が異性と関わることに異常な執着を持って責め立てる人物・組織といえば、思いつくのはあれしかない。ストーリーかタッツォーを狂信する過激な非公認ファンクラブのどちらかだ。

なにせリーサの記憶を覗いたときに知ったが、タッツォーはどうやらこの世界の太陽をどうにかしようとしているザールズの大軍勢をたった一人で蹴散らしたらしい英雄なのだ。憧れや好意を抱く人間も多いだろう。その中でも頭のネジが外れたような人々であればこれぐらいのことを実行しようとするかもしれない。

勝手な独占欲で他人を締め付けようとする価値観を持つような人間なのだから、きっと立夫の予想の斜め上の行動をやったのけるであらう。

そう考えると、目の前の女に対して怒りが湧いてきそうだが、ここは元いた世界ではなくイナースである。

立夫は、自分の価値観とこの世界の価値観に相違がある可能性を考え、焦って結論を出すことを止めた。

しばらく様子見して、うまく乗っ取って逃げよう！

リーサの肉体に憑依した成功体験を憶えていた立夫はいざとなったら自分にできる奥の手”肉体乗っ取り”でなんとか逃げ出そうと考え、しばらくは情報収集に徹することにした。

それから何分か待っていると、女はまた同じ質問を繰り返した。

「最終確認です。あなたは、フルガートのリーサ王姫と関係を持ちましたか？」

「いいえ。そのような事実はありません。」

（ファーストキスは奪われたけど、あれはチャラでいいよね？）

女は再び俯いた。考え事をしていると思ったが、よく見ると手元にある何かを注視しているようだ。

また数分が経ち、女の手元が微かに光った気がした。

その途端、女の背後が揺れて見えるぐらいの殺気がほとばしる。低く重い音が空間を揺るがし始める。

「どうやら、あなたの言っていることは虚偽のようですね。覚悟なさい。」

「そんな！本当にリーサ・・・王姫にやましいことなんてしてしまフエモッ」

立夫は必死に反論を試みるも、女がどこから出したのかわからないが冷水を立夫の顔面に浴びせかけた。

次の瞬間、立夫の頭をすっぽり覆う水球のようなものが出来上がる。その水球は重力から解放された水のように表面張力で立夫の頭を覆い続け、滴り落ちるようなことはない。

つまり息ができない。

自分の身に起きた不可解な現象にパニックになり、水球を取り除こうとするも水であるが故に掴むこともできず、頭や顔を撫でることしかできない。

頭を覆う水を吹き飛ばそうとか飲み込もうとか一通りの抵抗を試みた後、肺の中の空気を使い果たした立夫は苦しさのあまり、椅子から転げ落ち、倒れ臥した。

（死ぬ！さらば、地球よ・・・）

そして、タイムリミットが訪れ、混濁した意識の下で思い切り息（水）を吸おうとしたその寸前に、殆ど真っ暗になった視界の端で何かが動いたのが見えた。

ザバァッ！

立夫の頭を覆っていた水球が急に形を崩し、床に広がった。

「ガハッ！ゲボッ！ひゅうつうつうつ！ひゅうつうつうつ！」

なんとか命が繋がった立夫は死にたい気分になりながらも酸素を必

死に肺へと取り込む。人間とは矛盾した生き物なのだ。

倒れている立夫の頭上で何やら騒がしく誰かが言い争っている音が聞こえるが、過剰のストレスに晒された立夫の心は全てを閉ざし、気絶することを選択した。

立夫が気絶しているその部屋では、激高した例の女と、凍りついたドアをぶち破って部屋へとなだれ込んできた何者かが激論を交わしている。

その声は、【空駆ける旅団】のリーダー、いや、B O S Sのものであった。

「おい！どうしたって言うんだ！少しお仕置きをするだけではなかったのか？死に掛けているじゃないか！」

「太陽の子がこれしきのことです。タツツォー君の様子がおかしいことはわかっていたはずだよね？」

「それは・・・わかっていました・・・」

女は俯きながらも今目の前で起こっている異常事態を再確認する。

そう、太陽の子であり世界最強のサイキールであるシーマ・タツツォーには生半可なサイキスは通用しない。本人が常に自身の肉体を包み込んでいる強力なサイキス結界と、教団により精神体に直接施された反サイキス刻印の二重結界により、たとえ広範囲の破壊サイキスを直撃しても傷一つつけることができないのだ。

それが、昨夜から（前）フルガート王国の離宮において女が放った氷サイキスが直撃したり、先程の初歩的な拷問用水サイキスを抜け出せなかったりとおかしいことが続いていた。

女はタツツォーが自身の浮気を反省してやられ放題にしているのかとも思っていたが、どう考えてもおかしい。

おかしいのだが、浮気をされたという”事実”にどうしても素直に

なれない。

「でも、尋問用ビットはタツツオーが浮気をしていると、示しています・・・」

「まだそれを言うのかい？そもそも、そのビットには癖があることは知っているね？その上で、一体どんな質問をしたんだい？」

「タツツオーが」あの女と関係を持ったか？」と質問しました。」

「ああ、頭に血が上っているね。やはり、任せるべきではなかった。そのビットの特性すら忘れている。」

「そんなことはありません！私は冷静です！このビットは、質問した言葉に対する答えが真実か虚偽であるかを相手の精神体の揺らぎを読み取り判断するもの・・・！！」

「そう。お前の言葉は『リーサ王姫と関係を持ったか？』というものだった。これは『恋仲になったか』と解釈することはできるかもしれないが、ビットはその解釈をすることはない。『リーサ王姫と関わったか？』という質問であると判断して、それに対する答えの真偽を判定したんだ。つまり、質問が悪かった。」

「でも、精神体の揺らぎは確認できています！何もやましいことがなければそんなことは起きません！」

「それについては、リーサ王姫が告白してくれたよ。自身が操られている間にタツツオーに何をしてしまったのかを。まあ、その・キスぐらいは許してやるんだな。」

B O S Sは過去に爆炎のプレスを主武器とするドラゴンと戦闘した折、サイキス発動時にドラゴンが施す特殊なサイク操作を看破して自身の技に取り込み、爆炎や氷雪、雷轟の副産物として音が発生するプレスとは違い、音のみで攻撃する【咆哮】サイキスを完成させていた。余談だが、その勝負にB O S Sは勝利し、敗れたドラゴンはB O S Sを主人として従うようになったとか。

B O S Sが女の目を見て諭すように話しかける。

「私はもうお前とタツツオーを引き離すことは諦めたと言ったろう？ 私もあいつは気に入っている。そんなことよりも、サイキスを全く使えなくなっていることが気にかからないのか？ あいつはしばらくはサーカスの方で内密に預かることにしよう。何かがおかしい。勿論、タツツオーとイチヤコラしようとも構わん。」

「ふ、ふん！ 嬉しくなんてありませんからね！ もう行きますからあとはお願いします！」

そう言うと、ローブを羽織った女は慌てたように部屋を去っていった。

残された男は、女の変わり身の早さに呆然としていたが、気を取り直して床に転がっているシーマ・タツツオーを抱え上げ部屋を出て行った。

男がタツツオーと共にドアをくぐる時、小さな声で呟いた。

「何があった……。お前らしくない。」

ジェラシー ナイト クーラー 2

立夫、立ち上がる

立夫が気絶から立ち直り目を開くと、目の前には澄み渡った青い空と、力強く輝く太陽の眩い光が視界に飛び込んできた。周囲を見渡してみると、だだっ広い草原の芝生の上で寝ていたようだ。

「昼寝……じゃなかった。あの怖い女は……もういないか。ほっ」

ブンブンと首を振って周囲の安全を確認した立夫は心の底から安心して立ち上がった。

どうやら命拾いしたようだ。

自分の体を一通り手探りで確認して五体満足であることを確認し、周囲の状況を改めて観察する。

「リーサしゃ……は、いないか」

事情（記憶）を知ってしまった為に、同情の念を抱いていたリーサの姿は周囲には見えない。どうやら立夫だけがそこに捨て置かれたようだ。いや、そもそも黒尽くめの女に拉致されたのは自分だけだったのかもしれないと考え直し、周囲の状況を確認することにした。

「願わくば、彼女の無事を……にしても、ここまで”だだっ広い”という形容詞が似合う草原も珍しいな」

立夫の寝ていた草原は、とてつもなく広範囲に広がっており、36

0度どこを見ても地平線が続いている。
その所々に動物の群れのような黒い点々が動いているのが微かに視認できる。

「放牧でもしているのかな？」

暢気なことを考えながら観察を続けると、かなり遠いところに草原を突っ切るような赤い線が見える。

明らかに人の手が入ったように整ったその線は、きっと街道だろう。そう当たりをつけた立夫は、草原に留まる意味もないので街道を指すことにした。

着の身着のままの姿で放り出されたのか、食べ物も飲み物も持っていない為、早く人家を発見しないとせつかく拾った命を散らしてしまつかもしれない。

そんな恐怖も立夫の足を進ませた。

「にしても、なんて世界だよ……はあ」

ここ最近続けて起こった三度の拉致監禁騒ぎに心底疲れはてた顔で溜息をつく。

一度目は悪辣なる卑怯者シーマ・タツツオーによる異世界への拉致。

二度目は進退極まったフルガート王国によるエツチな拉致監禁。

三度目はよくわからない黒尽くめによる拉致監禁及び尋問と暴行。

立て続けにこれだけの事件に巻き込まれれば、誰だって溜息を吐きたくなるものであろう。

立夫もその多分には漏れず、自身に襲いかかってきた数々の理不尽に疲れていた。

「まあ、どうにかするしかないよなあ」

しかし、いつまでも落ち込んでいるわけにもいかない。

「とにかく、生き残ることが最優先だな」

自分を異世界へと攫ってきたタツツォーはいつの間にかいなくなってしまった。

自分を助けることができるのは、今のところ自分だけである。

「よし、色々やってみるか」

疲れの色　それも精神的な　が目立っていた立夫の表情に光が差し、足取りも幾分かしつかりとしてきた立夫は、気分を変えて歩み続けた。

立夫が街道に向かつて歩き始めてから、感覚的に約1時間が過ぎた。街道だと思われる赤い線は依然として遠くに見えるが、短い草が生えているだけで比較する物が存在していない草原で遠近感が狂ってしまうのだろうか。あとどれくらい歩けば街道に到達できるのかが全く読むことができない。

相変わらず目に入るのは広い草原と、点々と見える動物の群れらしき影。時折、空を鳥が飛び交っているようだが、小さな黒い影が見えるだけなので、どんな鳥なのかを見ることはできない。

この世界の動物がどんな姿形をしているのか若干の興味を持ち始めたが、離れすぎて見ることもできない上に、どんな性質を持っているのかわからないので近づかないほうが身の為であるかと頭を振り、黙々と街道へ歩いて行った。

街道へ向かって歩を進める中で、立夫は自身が憑依しているタツツオーの肉体を試していた。

これまで拉致・監禁の連続でろくに新たな肉体の性能を知ることが出来なかつた為、今後の為にこの肉体で実行可能なこととそうでないことを見極める必要があつた。また、この肉体の間合や体の可動範囲を把握して、日常生活で不具合を出さない為の馴らしの意味も兼ねている。

「とりあえず、趣味の確認か……」

助走をつけてからのハンドスプリング・ロンドート・バク転・バク宙のアクロバットコンビネーションやその場で跳び上がり捻りを一回転加えて天に向かって蹴りを繰り出すように回転する宙返りなど、曲芸部在籍時に得意としていたアクロバットを繰り出した。そこで立夫は憑依二日目？にしてようやくタツツオーの肉体性能の物凄さに気づいた。恐ろしく体が軽いのだ。

「元の肉体よりも動きやすいなんて……。いや、”動かし”やすい？まるで操り人形みたいだな」

立夫はほんの数カ月前までは曲芸部に在籍しており、全ての曲芸に通じる基本技術の【軽業】については相当に訓練を積み、どんな精密な動作もスムーズに行うことの出来る自信を持っていた。しかし、この新しい憑依先の肉体は鍛え上げてきた軽業を軽々と再現でき、しかも完成度が高まっており、立夫の本来の肉体以上の動きをいとも容易く成功させてしまった。

理由としては、タツツオーの肉体が立夫のそれよりも遥かにハイスペックであつたことに起因するが、他人の肉体に取り付き、微妙な

バランス感覚などの把握も完了していない現状において尚、精密な動作を可能としているのは、生き物を構成するのが【精神体】と【肉体】であることを体感したことが非常に大きい。

その事実を知った立夫は、【精神体】をコントロールする際に自身の体の細部に渡る拳動を明確にイメージすることを学んだ。そして、憑依した【肉体】を動作させる際にも同様に緻密なイメージの下に【肉体】を『操る』感覚を無意識に獲得することに成功した。

それは、鏡もカメラもないのに自身の【精神体】が宿る【肉体】の全身の拳動を外から観察するような視点を立夫に与え、先ほどの立夫の感想に帰結する。

この驚きと共に、沸々と体の奥底から沸き上がってくる一つの野望が立夫の表情を獐猛な野獣のそれへと変貌させる。

「これなら……これならグアバ48手コンプリートも夢じゃない！」

立夫がハイスペックな肉体を一通り動かしてみた手応えから導き出した答え。それは即ち、この世界において立夫が達成しなければならぬ使命にも似た目標となる。

ジャンピング・グアバット

それは、未だに1手しか再現することが出来ず、道半ばで諦めかけていた伝説のアクロバティック南国プロレスラー・グアバ仮面の技の数々。彼が引退するまでのわずか48試合で披露した全てのオリジナル技の再現であった。それらの技は派手なのに威力の高い究極の魅せ技として、後世のアクロバットプロレスラー達に絶大な影響を与えた技であり、立夫や幼馴染の剛の憧れでもあった。

「イナーズに来て初めて少し良かったと思えたよ……フフ」

続いて、グアバ48手の再現は追々探求していくとして、他にも新たに備わった能力を試してみることにした。

それは、神秘の力【サイキス】だ。イナーズに来てから使えるようになった不思議で何でもありの力。

その力を使いこなすことがこの世界で平穩無事に生活していく為に欠かせない要素になると踏んだ立夫は、しかし、サイキスを自身の意思のもとに発現する術を知らない。だからこそ、誰もいない草原こそがその力を試すにふさわしい場所だと考えたようだ。

「とりあえず、喉が渴いたから水を出すとかできないかな。あの黒い女も水を何も無いところから生み出してたし」

立夫は、気絶する前に自分を拷問した黒尽くめの女のことを思い出して顔を顰め、その記憶を振り払うように頭を振った。そして、両掌で頬を張って気合を入れる。

「よっし！やってみよう！フン！」

街道へと歩む速度は変えずに、立夫は両手の指先から水が湧き出すイメージを思い浮かべ、両手を合わせながら目の前に突き出す。幽体離脱や肉体乗っ取り、鉄の輪伸ばし等の経験からサイキスを行使する際に使う『神経』みたいなものがあることがわかっていた為、その神経にイメージを流しこむように力を込める。

神経と言うよりは精神体を動かす筋肉のようなものであるが、とにかくグツと力を込めた。

何も起きない。

「水だあゝ。水よ！水に！」

しかし、何も起きなかった。

「やっぱりダメか……はあ」

”立夫の習得した”サイキスの行使方法で水を発生させるのは難しい。何もない空間にサイキスで物質を生成する際には、物質の状態を変化させるサイキスよりも更に詳細なイメージが必要なのである。水とはどのような色、味、感触などの特性を持ち、どのように存在するのか？ を明確にイメージできなければならないのだ。

それを成功させるためには、一般的なサイキールが少なくとも50トンの水を蒸発させるぐらいの覚悟が必要である。

だが、一般的なサイキール達はそのような迂遠なサイキス習得法を必要としない。なぜならば、サイキス行使には他にも幾つかの方法が確立されているためだ。

例えば特殊な音を発生させることでサイクに働きかけてサイキスを発現する【音法】^{ねほう}や特殊な図形にサイクを流しこむことでサイキスを発現する【図法】^{ずほう}などが代表的なものである。

それらを学べば、明確なイメージを必要とせず簡単にサイキスを発現することができるのであるが、その事実を立夫に教えてくれる者はこの広い草原のどこにもいなかった。

しかし、立夫の視界の届かぬ草原の各所から、立夫を見つめる3つの視線はあった。

一つの目はおもちゃを見つけた子供のように、その対象に駆け寄っていた。

一つの目は冷静に立夫の急所を見極め、その対象の死角に潜み、虎視眈々と好機を待っていた。

一つの目は疑問と違和感に苛まれ、思わず「ありゃあ、酷いもんですぜ。本当にどうしちゃったんだい？」と届かぬ声でその対象に問うた。

1時間後、立夫は謎の動物の群れに囲まれていた。立夫からは動物の群れに近づいていった記憶はないので、動物達が立夫に近づいていたのだろう。

立夫の周囲には牛の体型にマントヒヒの顔を持つ動物10頭ほどの群れが立夫を囲むように歩いていた。大きさは子牛ほどで、立夫の腰の辺りに頭がある。それらが一樣に好奇心を^{あらわ}顯にした表情で立夫をに熱視線を向けていた。

立夫にはその動物に囲まれるような覚えはないのだが、動物の方にはあるようだ。

その動物の正式名称はチモルフといい、成体は子牛ほどの大きさの小柄な動物である。立夫のいた世界で言う猪のように突進と体当たりを武器とする体格に似合わず馬力があり、雑食性の動物である。群れで狩りを行う際は必ず狩りの対象を複数の仲間で囲み、四方八方からの体当たり攻撃で獲物を仕留めるチームワークを重んじる種であり、子育てもチームで行なっている。

そんなチーム性重視のチモルフは、単体で行動する個体を中心に狩りを行う傾向にある。とはいえ、単体の力が弱いからこそ群れを作っているそれらは、単体でも群れに対抗しうる存在を知っており、だからこそ、この時も立夫を観察していた。要するに、目の前にいる個体の強さを測っていたのだ。

そんな背景を知る由もない立夫は、尋常ならざる敵意を向けてくる動物たちに心底怯えていた。

「なななな、何でしょうか？まさか襲ったりしないよね？どうかここは見逃しては頂けないでしょうか？」

黒い毛皮越しに見える筋肉の塊と、大きく張り出した額に、このヒヒ牛　と勝手に命名　の武器を垣間見た立夫は、突進されたら大事なところを潰されそうだなと想像し、目を合わせないように群

れを離れようとした。

そうは問屋が卸さないことを、すぐに立夫は思い知る。

「チョチョチョチョチョチョ！チョチョチョチョチョチョ
！」

群れの囲いを抜け出そうとした瞬間、それまで静かに立夫を見つめていたヒヒ牛達が、奇声を上げ始めたのだ。しかも、立夫が怯んでいる隙に再度包囲網が完成させ、じりじりと立夫を追い詰めていくいきなりすることにギョツとした立夫は、いつまでも「チョチョチョ」と喚くヒヒ牛に恐怖し、歩く足を止めてしまったが、次の瞬間、このままでは危険と判断し、目の前のヒヒ牛を飛び越え駆け出した。

立夫の逃走を契機にヒヒ牛たちの攻撃は始まった。

「僕が何したって言うんだよ！ただ街道を目指しているだけじゃないか！」

声が届かないとわかつているが不満が口を突き、なんとか包囲網の薄くなった所を突いて抜け出し、完全に囲まれないように気を配っていたが、底上げされた体力も無限ではない。

集団の連携に翻弄され続けた立夫は、走る速度が徐々に遅くなっていき、ヒヒ牛たちの体当たりが立夫を襲うようになった。

ヒヒ牛の筋肉隆々の体つきと広く張り出した額を見て、ヒヒ牛達の武器は”突進”と”頭突き”であることを予測していた立夫は、予測どおりに突進してくるヒヒ牛と直線上で相対しないように気をつけながら、ステップを踏む。ヒヒ牛達の１メートル程度の小さな体躯と立夫が磨いてきた曲芸の基本である軽業のおかげで、時に闘牛士のようにステップでかわし、時に体操選手のようにヒヒ牛の頭上を跨ぎ飛び、体重とスピードの乗った直撃を避ける。

（よし！なんとかよけられた！）

ドゴッ！

真横から突進してきた1頭のヒヒ牛の頭突きをギリギリでかわした瞬間、背後からの衝撃で前へつんのめった。

「痛っ！グボッ！」

前へつんのめると、今度もタイミングを合わせたように真正面からスピードに乗ったヒヒ牛の頭突きが腹に直撃し、跳ね飛ばされ無様に地面に転がる。さすが群れで行動するだけあって、連携攻撃がうまい。

しかし、おかしい。痛いことは痛いだが、体育の柔道の実習時に模範という名の生贄として教官に投げ飛ばされた程度のような痛みしか感じないのだ。

立夫はその原因をヒヒ牛の非力と判断していたが、実際はタツツオの強靱な肉体と肉体に施された仕掛けのおかげであった。

「意外と大丈夫じゃベエツ！！」

しかし、ヒヒ牛達の攻撃は止むことなく立夫に向けて頭突きを繰り返す。

立夫が体制を崩して地面に倒れこんでからは、好機と見たのか、味方同士が衝突し合うことも構わずにヒヒ牛たちのラッシュが繰り広げられている。中には立夫の背中の中のしかり、後頭部に向かって頭突きを繰り返すものもあり、立夫の周辺はヒヒ牛たちが入り乱れて砂埃も舞い始めた。これで太鼓叩きがその場に居合わす僥倖に巡り合うことができれば、そこにギャグアニメの喧嘩シーンが再現されたのかもしれないが、残念なことに立夫がタコ殴りにされている

のは人つ子一人見当たらない草原の真ん中である。ヒヒ牛の駆ける足音と少し鈍い音がその場に小さく響くだけであつた。

しばらく後、いまだに巻き上がる砂煙の中で、ヒヒ牛達は死屍累々の山を築いていた。その全てが同士討ちによる脳震盪であることを考えると、自分に襲いかかる動物の群れは個体として弱い分類に入ることがよくわかる。それを理解すると、一方的に攻撃をされるがままの自身に疑問を覚え始めた。

（なんでやられっぱなしなんだ？）

立夫は青タンが膨れ上がった顔を両腕で必死にかばい、攻撃に耐えながら自問する。

（なぜ、攻撃されているのに身を守ることしかできないのか？ な
ぜ、全力を出さないのか？）

ヒヒ牛の猛攻は止まらず、決め手に欠けるヒヒ牛達の煮え切らない攻撃に立夫はフラストレーションが溜まっていく。

そんな状況が腹時計にして腹八分目に到達するかしないかの所で、立夫はブチ切れた。

怒りの矛先は立夫の背にのしかかり、執拗に頭突きを繰り返しているヒヒ牛Aに向かった。

「どけえええええええええ！おらあああああ！」

立夫は自分の背中にのしかかっていたヒヒ牛の前足を両手で掴むと、

両足で地面を蹴る。立夫の体はヒヒ牛Aの前足を支点に浮き上がり、ヒヒ牛Aを背中に背負うように密着させて前転した。

背中越しに立夫と相対位置が逆転したヒヒ牛Aは「チャゲツ！」と呻き声を上げもがこうとする。

だが、回転はそこで止まらず、立夫が足を地面に着地させ、踏ん張るまで続き、踏ん張った立夫は今度は上体を大きく前傾させ、背中に背負ったヒヒ牛を空に向かって投げ飛ばした。

「どりゃああああ！ローリング・グアバアアア！」

立夫の奇妙な叫び声と共に空高く放り投げられるヒヒ牛A。その表情はどこか諦めの混じった、しかし、さっぱりしたようなつぶらな瞳を立夫に向けながら地面に落ちて気を失った。

その技はグアバ48手の8番「ローリング・グアバー」であった。

この技は背中に背負った敵と共に前転し、一回転した後に踏ん張り、前転によって生まれた運動エネルギーを足から腰、腰から背筋、背筋から腕へとロスなく伝えることで自分よりも巨体の敵すら投げ飛ばしてしまう脅威の投げ技であった。噂によると、試合前日にテレビを見ていて偶然プロサッカー選手がスローインの際に見せた、ローリングスローに感動して真似をしたらしい。サッカーとプロレスの邂逅により生まれた脅威の投げ技は、その後挑戦しようとした者はいたが、完全な再現には至らなかった。

その技を遂に立夫は再現したのだ。相手が自分よりも巨体でないのは残念だが、重かったのだよしとする。

同時に、立夫はその時ようやく答えにたどり着いた。

（その手があったか！）

元いた世界・地球での常識に囚われていた立夫は、例え獣から身を

守るためであつたとしても、他者を攻撃することに無意識の抵抗感を持っていた。否、他者を攻撃するという意思を持ったことがなかった。

それが、元いた世界での規範であり、敬愛する両親から学んだ良識であつたからだ。

しかし、ここはイナーズである。外道なタツツオーに無理やり攫われてきた立夫が憑依先のタツツオーの体面を気にして良識に囚われる必要性なぞ微塵もあり得てはいけない。

外道には外道で以つて報復をしなければならない。

そして、立夫の本能を律する良識の一部が音を立てて壊れ始める。良くも悪くも役人の父と慈愛に満ちた母に囲まれ、一般的に見れば理想的な環境の下で育まれてきた立夫の価値観、役割、自己実現欲求などにより構成された仮面に攻撃的な側面が上書きされる。異なる世界で別人の体を持つが故に形成される新たな仮面。それがこの世界における立夫の行動を左右するものとなるのだらう。

「ぶつ飛ばしてやる！」

自らを戒めていたルールを書き換えることで、それまで必要としなかった攻撃性を獲得した立夫は、晴れやかで残忍な笑顔を振りまきながらヒヒ牛たちに語りかける。その目はまさに外道のそれであつた。

目の前の煩わしいヒヒ牛を倒す為、そして、タツツオーを社会的に殺す為に、立夫はその極めて重要な一步を踏み出したのだ。

10分後、グアバ48手を活用してヒヒ牛の群れを蹴散らした立夫は、無傷のヒヒ牛に跨っていた。

「もつと速く走れるだろう！もつと風になれよ！」

立夫は、戦闘後の昂ぶりを鎮めることなくヒヒ牛Ｚの脇腹をゲシゲシと足蹴にし、乗り物にされたヒヒ牛Ｚを苛め抜いていた。

しかし、ヒヒ牛Ｚの目は負の感情に支配されずに使命感に溢れ、その過酷な任務を全うしようと努力する姿は、どこかいじらしかった。群れの仲間を全て戦闘不能にされ、恐怖で逃げ出したいのはずなのに群れを見捨てる事が出来ずにオロオロとするばかりであったヒヒ牛Ｚに対して、立夫は言葉が通じないという事実を無視して交渉を持かけていたのだ。

「お前が僕をあの街道まで無事に届けることが出来れば、お前の群れにトドメを刺さずにおいてやろう」

もし、道中で逃げ出したらわざわざ引き返してトドメを刺すのだろうか？という疑問には立夫も答えられないだろうが、相手は大して知能の高くない動物だからわかりはしないだろうと高を括ったの交渉である。

しかし、それ以前に言葉が通じない。通じないはずなのに、ヒヒ牛Ｚは交渉に応じて立夫をその背に乗せて歩み始めた。

有無を言わずヒヒ牛Ｚの背に跨ったというだけの理由かもしれないが。

立夫はヒヒ牛Ｚに跨り、街道へと急いだ。

立夫の遙か後方の岩陰に、立夫とチモルーフの群れの衝突を監視していた視線があった。

監視者は懷から手のひら大の楕円形のガラス板のようなものを取り出し耳に押し当てブツブツと何かを呟いた。

途端にガラス板に赤い光が浮かび上がる。ガラス板には複雑な図形

が彫られており、その図形が淡い光を発していた。
やがて、光の色が緑色に変わると、監視者は虚空に向かって話し始めた。

「団長、ルームですぜ。タッツォーの監視報告をしやす。」

『ということは、【魔獣】と戦闘できたのか……。ああ、頼む。』

監視者の持つガラス板から小さな声が漏れ聞こえてくる。どうやら通信機のようなものだ。

「いや、戦闘したのはただの【獣】のチモルーフの群れですぜ。もうわかったと思いますが、酷いもんですぜ。サイキスは使えないは、変な格闘技で戦闘するはで、見た目以外は別人なんじゃねえかと思うほどですぜ。」

『まさか、あんなのに襲われるほど……。思ったよりも深刻だな。』

この世界に生きる獣の類は幾つかにわかれている。広義に分類するとサイキスを使う【魔獣】とサイキスを使えない【獣】の二種類に分かれており、【魔獣】は異種間のコミュニケーションが可能であり、【獣】は不可能であるなどの特徴が存在している。

タッツォー（立夫）が襲われたのは、【獣】であり、本来タッツォーの実力があれば近寄ることすらできない類の種である。監視者とその相手が驚くのも仕方あるまい。

「大体、尋問したコゴに気づかない時点でおかしいと思いやしたよ。あれは、早々に保護するべきですぜ。」

『うむ、そうだな。これより出発の準備を整える。準備でき次第こ

ちらから連絡するからもう暫く監視を継続してくれ。
□

ジェラシー ナイト クーラー 2 (後書き)

知らぬ間にお気に入り登録してくださった方が……感無量。ありがとうございます。

既得権益との戦いはそろそろ始まります……かもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9441u/>

オセロみたいな世界で勇者の抜け殻に取り憑いたみたいです。

2011年11月30日20時55分発行